

燈光



会長就任にあたって

燈 光 会 会 長 ^いわ ^さき ^てい ^じ二
岩 崎 貞 二
(令和元年6月11日就任)



燈光会の会長に就任させていただきました。歴史のある燈光会ですから、長年培ってこられたいい伝統を承継し、発展させながら、新しい課題にどう取り組んでいくか、これから試行錯誤していきたいと思っています。

燈光会の現状は多くの課題をかかえています。

燈光会が運営する参観灯台に来ていただく人が減少を続けています。多くの人に灯台の果たしてきた役割、灯台の歴史、灯台からの景観を楽しんでいただくことは大切なことだと思えます。そうすることが燈光会の果たすべき役割のはずですが、なかなかうまくいっていません。

参観していただく人たちが減少していることは燈光会の経営にも大きな影響を与えています。燈光会の経営を支えているのは会員の皆さんの会費だけではなく、多くは参観灯台の参観寄付金です。残念ながらピーク時は年間160万人を超えていた参観者が70万人と半減しています。

灯台に多くの人に来ていただけるよう何をしていけばいいか、その対策をするのに必要な財源をどうするか考えて、実行していきま

す。
灯台のレンズ、機器、関連する文献で歴史的価値のあるものをど

■プロフィール

(昭和24年8月25日生)

昭和49年3月 東京大学経済学部卒業
昭和49年4月 運輸省入省
平成14年8月 国土交通省航空局管制保安部長
平成16年7月 国土交通省航空局長
平成18年7月 国土交通省自動車交通局長
平成19年7月 海上保安庁長官
平成21年8月 独立行政法人 鉄道建設・運輸施設整備支援機構理事長代理
平成23年5月 同上退任
平成24年6月 公益社団法人 日本海洋少年団連盟副会長就任
平成25年6月 一般社団法人 空港環境整備協会会長
平成30年6月 同上退任
平成30年6月 一般財団法人 航空交通管制協会理事長就任
平成30年6月 一般社団法人 全国レンタカー協会会長

う整理し、保存していくかについても考えていく必要があります。少しづつ整理を始めていますが、今後どうしていくかの道筋がまだついていません。お金もかかります。見識、学識のある方の力も借りる必要があります。

参観灯台の施設も古くなっています。特に資料展示室のリニューアルが課題です。これも少しづつ進めています。相場の経費が必要のため、このままのペースで行くと30年以上かかります。せっかく灯台に来ていた人たちに、資料展示室で学び、体験いただければいいと思いますが、リニューアルの計画がたっていません。

今はチャンスでもあります。インバウンドの人たちが増えていきます。海上保安庁も本格的に灯台を観光に活用していこうとリードしてくれています。こうした流れを燈光会もしっかり受け止めて課題を少しづつでも解決していきたいと思っています。

燈光会は灯台で苦勞された方々の互助組織としてできたと承知しています。長年灯台とともに歩み苦勞された方たちにお役に立てる組織として、また、皆さんが愛着を持ってこられた灯台を多くの人々に知ってもらおう組織として燈光会が発展するよう、努力をします。よろしくお願いします。最後になりましたが、山田前会長のご尽力に対し、深く敬意を表し、就任のあいさつとさせていただきます。

関門海峡海上交通センター30周年記念特集

関門海峡海上交通センター



30周年記念のロゴマークできました！

関門海峡海上交通センターは、平成元年6月に運用を開始し、本年6月1日に30周年を迎えました。



所長褒賞を受ける金崎主任運用管制官

運用開始30周年にあたり、これまで御協力いただいた関係各所への謝意と海上交通センターや海上保安庁の理解促進とともに管制課程学生募集などをPRすることを目的として、記念行事等で使用するロゴマー

クを決定しました。全職員に募集したところ、7名から9点の応募があり、全職員による投票で、金崎主任運用管制官の作品に決定、所長褒賞を受賞しました！

ロゴマークは、30周年を表す「30th」を大きく中心に、その回りにマーチスタ、船舶、航路しよう戒船を配置するとともに、下段全体に呼出名称である「KAN

門司みなと祭
関門海峡海上交通センター
施設一般公開！

関門海峡海上交通センター一任、特別開放日程に合わせ、多くの方々に海上交通安全観望していただくため「一般公開」を行います。

一般公開では、「通航船舶と無線交信する運用管制官の募集」「関門海峡が一望できる最上の開放の展望台」などを行います。

募集のご案内をよりお持ちしております。お申し込みは、6月1日(土)午後1時00分～午後3時00分まで、〒744-0211 福岡県北九州市門司区松原2-10-11

お問い合わせ先 関門海峡海上交通センター 電話 093-381-6699
https://www.kahom.mits.go.jp/kanmon/



30周年記念ロゴマーク

門司みなと祭施設一般公開



記念写真：金崎主任運用管制官(写真前列中央)

作者の金崎主任運用管制官は「関門マーチスは、30年もの間、様々な船舶に対し、情報提供や協力をし合い歩いてきており、航路しよう戒艇とも協力し、関門海峡の安全確保に努めてきたことを形にしたかった！」と熱い思いを語ってくれました。

MON MARTIS」を大きく表示させ、背景には、関門海峡のシンボルである関門橋を配置しています。関門海峡の安全で美しい豊かな海を表現しており、今後、施設一般公開を初め各種広報等に使用することで、海上交通センターのPRに大きく貢献すると期待されます。



写真-1

門司みなと祭りに合わせた公開で、午前10時の開場前には10名近い来場者の行列、リーダーの分解能など鋭い質問、数時間も見学する方、15時の終了時間オーバーまで見学が続きました(写真-1)。

遙々大分県から海上保安官志望の方に来場いただきましたが、運用管制官でなくて潜水士希望、元潜水士の運用管制官がマンツーマンでご案内しました(写真-2)。

海上交通センターは敷地が狭く十分な駐車場が確保できないため、約半数の方には門司駅などから気温30度近い猛暑の中を30分もかけて歩いて来て頂きました…感謝。

一般公開しました！地域への感謝を込めて！

5月25日、運用開始30周年にあたり地域への感謝を込めて一般公開を開催し、151名に来場いただきました。

門司みなと祭りに合わせた公開で、午前10時の開場前には10名近い来場者の行列、リーダーの分解能など鋭い質問、数時間も見学する方、15時の終了時間オーバーまで見学が続きました(写真-1)。

遙々大分県から海上保安官志望の方に来場いただきましたが、運用管制官でなくて潜水士希望、元潜水士の運用管制官がマンツーマンでご案内しました(写真-2)。



写真-2



写真-3



写真-4

公開の模様を、KBC、RKB、TNCのテレビ3社が取材し、TV放映されました。地域の方々などに、30年の海上交通センター業務への協力の謝恩と海上保安庁への理解を図ることができました。特に、来場者に喜んでもらうために管理係長を中心に、お金は無いけど知恵はある、色々企画しました。

○その1…海上保安協会の協力で30番目と118番目の来場者へ記念品のグッズを贈呈して「うみまる」と記念撮影(写真-3)

○その2…もれなく制服試着写真カレンダー(写真-4)を贈呈、試着時(写真-5)に撮影し、

見学後に海上保安協会協力30周年記念ポールペンとセットでお持ち帰り
○その3…アンケート提出で、もれなく4種類の缶バッチのうち1個をゲット、缶バッチは次長の手造り(写真-6)

○おまけ…更に当たり缶バッチで「うみまる」や「うみん」のキーホルダー(写真-7、8)をゲット。キーホルダーは所長、次長、課長からの寄付

どの企画も好評で、来場の方々には笑顔の絶えない最初から最後までドキドキの公開でした。



写真-6



写真-5



写真-8



写真-7

高校生が海の管制官を体験！
海の管制官を募集中！

7月7日、海の管制官の募集活動の一環として、北九州市内の高校3年生4名が、運用管制官の業務を体験しました。

今回の体験型見学会は、学生募集で学校訪問した際に、管制課程の知名度をもっと向上させる必要があると感じた事がきっかけで、第七管区海上保安本部や若松海上保安部の協力のもと実現しました。

最初に、小野運用管制課長が、海上保安庁と海上交通センターの業務概要を説明、その中で管制課程現役学生からのビデオメッセージに、高校生は真剣に耳を傾けていました。その後の運用室の見学では、リーダー画面を見ながら日本語や英語が飛び交い通信している管制官の後姿や、今まで見たことがないような大きな双眼鏡で関門海峡の通航船を見たり、興味津々の様子でした。



小野運用管制課長による業務説明



大きな双眼鏡をのぞく学生

いよいよ、運用管制官の体験です。初めに、上原安全対策官から本日の訓練卓を使った運用管制体験シナリオと無線機の使い方等のレクチャーを受け、次に、金崎主任運用管制官によるシナリオのデモンストレーションを行いました。

そして、緊張の面持ちで、順々に訓練卓に着席、無線機のヘッドレストを装着、じっとシナリオを見て予習しています。すると、通航船舶からのメッセージ「関門マーチス、こちら〇〇〇」に、「〇〇〇、こちら関門マーチス、C H 14に変波お願いします」位置通報を見事受信、主任運用管制官の指導のもと、「情報です。現在の潮流は〇〇〇」と関門航路の情報提供を実施し

ました。外国船に対しては、果敢に英語で情報提供を実施するツワモノの学生もいました。

訓練終了後、本年3月まで海上保安学校情報システム課程の教官だった赤司運用管制官が学校生活についての説明をしました。教官目線・学生目線の双方を持ち合わせている赤司官ならではの（良い意味で）生々しい体験は、高校生に影響いたことでしょう。

終了後のアンケートには、「海上保安庁の知らなかった良いところをたくさん知った」「普段はできないシミュレーションなど貴重



上原安全対策官（左）、金崎主任運用管制官（右）によるシミュレーション訓練体験



宇都宮次長による屋上での説明



赤司運用管制官による学校生活の説明



朝日新聞の取材の様子

な体験ができた」「体験でき興味が一層湧いた」等、海上保安庁への関心の高まりが感じられました。

4名の高校生と1名の保護者へ、海の現場の見学と業務を実際に体験してもらうことで、海上保安庁や海上交通センターへの理解がより深まったと感じました。

並行して朝日新聞の取材も行われ、訓練している高校生の様子を見て、記者は「とても緊張感をもって良い表情で訓練をしている」「初々しい学生へのインタビューができ良い記事が書けそうだ！」と述べていました。

関門海峡海上交通センターでは、引き続き、関門海

峡の安全・安心を提供していくとともに、地域に寄り添い、少しでも多くの方々へ海上保安庁や海上交通センターの理解を図ってまいります。

ラジオから音が聞こえた！

♪運用30周年夏休みのラジオ工作教室♪

7月21日、関門海峡海上交通センターでラジオ工作教室を開催しました。

無線への興味をきっかけに、海上交通センターの理解を深めてもらおうと、北九州市の小学生44名を対象に開催したものです。

北九州市門司区内の5つの小学校に案内を配布したところ、直ぐに定員一杯となり、「キャンセル待ちは？」など問い合わせもありました。

当日は、台風が九州に接近…を免れ、雨の降る中なんとか開催することができました。

最初に、海上交通センターの業務を見学。雨のため屋上での見学はできなかったものの、関門海峡や、潮流についてお勉強。管制官の英語の応答にみんなの興味をひきつけました。

工作教室は、日本無線(株)のボランティアスタッフと海上交通センター職員の手で行いました。

7月21日 (日)開催

参加費無料

関門海峡海上交通センター
30周年記念行事

第七管区海上保安本部

関門海峡海上交通センター見学 & AM/FMラジオ工作教室

対象
小学校4,5,6年生
先着**40名**

参加者募集
■対象 小学校4,5,6年生(保護者同席可能)
■定員 40名(応募者多数の場合先着順)
■日時 令和元年7月21日(日)
午前部10:00~13:00 20名
午後部13:00~16:00 20名
■場所 お問い合わせ先
関門海峡海上交通センター
北九州市門司区長崎6番2-10-11
TEL 093-381-6699
■応募方法 要即応募事項の内容を電話でお知らせください。グループでの応募も可能です。
■応募期間 6月24日~7月5日(09:00~17:00)
■その他 必要な道具はこちらで準備します
提供していただいた個人情報等は終了後、速速に削除いたします。
■7724 裏面記載

「無線」ってなんだ?
「無線」の仕組みが分かるよ。
はんだごてを使って作るよ。
分からないこと、むずかしいことは、スタッフがしっかりサポートするよ。海の安全情報を聞いて無線が海の安全に役立っていることが分かるよ。

作ったラジオはプレゼント



主催 関門海峡海上交通センター
協力 JRC 日本無線株式会社

案内のチラシ



運用管制課業務の説明



情報課業務の説明

「電波とは何？」の解説、そして、Googleや半田ゴテなどの安全具や工具の使い方の説明を行いました。

いよいよ、工作開始、子供達がラジオキットの箱を開くと、「ホントに作れるの?」「えー難しそう!」の声があがりました。アンテナのコイル巻きや部品の取り付けを始めると、一転、工作教室は真剣な雰囲気になりました。

完成して、ラジオから音が聞こえると、大満足の笑み、イヤホンに耳にあて、海上交通センターの大型船通航予定情報などを夢中で聞き入りました。



お父さんと一緒にコイル巻き



半田ゴテ使用中（部品の取付け）

子供達には、夏休みの良い思い出となりました。付き添いの保護者からは、「子供が真剣に取り組む姿を見ることができてよかった。」と、保護者にも良い思い出ができたようです。

最後に、子供達がラジオを工作している写真入りカレンダーを一人ひとりにプレゼントするというミッションがあり、44名全員の写真に抜けがないか職員一丸で、顔や洋服の柄で照合し、なんとか帰りの時間までに間に合わせました(汗)。子供達の喜ぶ姿に、職員もほっと胸をなでおろしました。

保護者や幼い子供にも配慮して、休憩や食事のため

のスペースを設置、折り紙コーナーやDVDの放映も行いました。

社会貢献活動として教材の提供やボランティアスタッフの派遣を実施いただいた日本無線(株)と小学生の募集を調整いただいた北九州市教育委員会へ心から感謝いたします。



幼児用の休憩スペース

関門海峡海上交通センター
ラジオ工作教室and見学記念

令和元年7月21日

| 7月 | | | | | | 8月 | | | | | | 9月 | | | | | |
|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|
| 日 | 月 | 火 | 水 | 木 | 土 | 日 | 月 | 火 | 水 | 木 | 土 | 日 | 月 | 火 | 水 | 木 | 土 |
| 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 |
| 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 |
| 13 | 14 | 15 | 16 | 17 | 18 | 13 | 14 | 15 | 16 | 17 | 18 | 13 | 14 | 15 | 16 | 17 | 18 |
| 19 | 20 | 21 | 22 | 23 | 24 | 19 | 20 | 21 | 22 | 23 | 24 | 19 | 20 | 21 | 22 | 23 | 24 |
| 25 | 26 | 27 | 28 | 29 | 30 | 25 | 26 | 27 | 28 | 29 | 30 | 25 | 26 | 27 | 28 | 29 | 30 |
| 31 | | | | | | | | | | | | 29 | 30 | 31 | | | |

| 10月 | | | | | | 11月 | | | | | | 12月 | | | | | |
|-----|----|----|----|----|----|-----|----|----|----|----|----|-----|----|----|----|----|----|
| 日 | 月 | 火 | 水 | 木 | 金 | 日 | 月 | 火 | 水 | 木 | 金 | 日 | 月 | 火 | 水 | 木 | 金 |
| 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 |
| 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 |
| 13 | 14 | 15 | 16 | 17 | 18 | 13 | 14 | 15 | 16 | 17 | 18 | 13 | 14 | 15 | 16 | 17 | 18 |
| 19 | 20 | 21 | 22 | 23 | 24 | 19 | 20 | 21 | 22 | 23 | 24 | 19 | 20 | 21 | 22 | 23 | 24 |
| 25 | 26 | 27 | 28 | 29 | 30 | 25 | 26 | 27 | 28 | 29 | 30 | 25 | 26 | 27 | 28 | 29 | 30 |
| 31 | | | | | | | | | | | | 29 | 30 | 31 | | | |

思いのつまった写真入りカレンダー



海上保安学校だより

海上保安学校航行援助教官室

経ヶ岬灯台に行ってきました

情報システム課程第27期初の校外実習

令和元年6月24日(月)、海上保安学校情報システム課程第27期生(2年生)37名は、舞鶴海上保安部の協力を得て経ヶ岬灯台での校外実習を行いました。実習日は、梅雨入りするかしないかと予報されている時期でしたが、学生の日頃の行いが良かったのか、晴れとなり快適な実習日和となりました。

経ヶ岬灯台において、学生は、実際に運用されている機器等を目にしながら、機器類の説明を受けられただけでも新鮮さを感じていたほか、全国に5カ所しかない第一等フレネルレンズの大きさに圧倒され、灯台に雷害対策がなされていることなどに感銘を受けていました。

現場に直結する実習ということもあり、学生は真剣に取り組み、授業で学んできたことの更なる理解に努

めていました。

情報システム課程第27期生は、この実習を皮切りに多くの実習を行う予定です。実習にあたり、訪問先となる本部、部署等のご協力は必要不可欠であり、多大なご迷惑をおかけすることになりますが、海上保安庁の将来を担う学生の育成のため、今後ともご支援のほどよろしくお願ひします。

それでは、今回実習を受けた学生のレポートから感想の一部を紹介させていただきます。

～情報システム課程第27期

野中学生のレポート(抜粋)～

令和元年6月24日、私たちは実習のため、経ヶ岬灯台を訪れました。私たちが灯台に着いてまず目に留まったものが灯塔の中にある巨大な第一等フレネルレンズでした。この巨大なレンズを動かしているのは、水銀層式回転機械と呼ばれる装置で、1893年にフラ



灯室での航路標識機器等の説明



敷地内の草刈りも実施



実習終了時の集合写真

ンスの灯台技師が開発したものだ」と知り、重いレンズを円滑に回転させるために水銀が使われていることにとっても驚きました。舞鶴海上保安部の交通課職員の方からは、この装置から水銀ガスが発生していないかなどを確認するため、半年に1度灯台の点検を行っているかと教えて頂きました。

灯台は、明治31年に建設されたにも関わらず、外観も灯台の中もとても綺麗で、職員の方々が灯台を大切に

思う気持ちがとても伝わってきました。また、実際に灯台で滞在業務に携わっていた職員の方からは、当時の思い出なども聞かせていただき、さらに灯台への興味が湧くきっかけにもなりました。

私たちは、この学校を卒業して全国の灯台の保守や管理に携わることとなるので、今まで灯台を守り続けてきた諸先輩方の思いも背負って、業務にあたらないければならないと強く感じた実習となりました。そのた

めにも、残り僅かなこの海上保安学校での生活で、現場で通用するための知識や技能を習得できるように、日々努力していこうと思います。

「五森祭」開催

海上保安学校では、恒例となっている五森祭が令和元年7月7日に開催されました。五森祭では、舞鶴灯台一般公開、五森太鼓、海上保安体操実演、カッターレース、音楽隊演奏及び練習船「みうら」一般公開等多彩なイベントが催され約2600名の方が来校されました。

これまで、五森祭実行委員と各種イベントの責任者を2年課程である情報システム課程の先輩期がまとめ上げ、五森祭の中心的役割を担ってきたところですが、今年度は、管制課程第1期生も2年課程の先輩期となつたことから、情報システム課程学生と管制課程の学生が協力・分担して五森祭の運営にあたり各種イベントを成功させました。

管制課程第1期生が舞鶴灯台一般公開の責任者となつていたことから、舞鶴灯台一般公開の実施状況について当該学生から紹介させていただきます。

.....

〔令和元年「五森祭」舞鶴灯台一般公開を終えて〕

元号が平成から令和に替わり、令和初めての「五森祭」が7月7日に海上保安学校で開催されました。午前中は小雨が降っていましたが、だんだんと太陽がのぞいてきて、とても良い気候となりました。

今年、舞鶴灯台一般公開のイベントには750名以上の方が訪れ、約360名の方が灯台に登られ大盛況となりました。

今年の舞鶴灯台一般公開のイベントでは、灯台内の公開はもちろん、灯台で実際に使用されていた機材等の展示のほか、灯台や巡視船のペーパークラフト、海上保安学校のポストカード等のグッズの配布や、熱中症対策のため、麦茶の提供を行いました。今年、管制課程卒業後の業務紹介である「海の管制官」の動画や、情報システム課程卒業後の業務紹介を見ていただくようにYouTubeや海上保安庁のホームページに飛ぶことができるQRコードを灯台内の壁に貼りました。また、第八管区海上保安本部交通部からディスプレイ等の機材をお借りして、「海の管制官」、灯台150周年式典にて放映された動画「灯台150年の歩み」を上映し、灯台や海上保安庁に興味を持って

いただいている方に加え、休憩所として利用していただいている方にも楽しんでもらうための工夫を行いました。

今回の五森祭の準備期間は、雨が降っていることが多く、昭和43年に建てられた舞鶴灯台は屋根部分が古くなっているため、雨漏りが発生しているところがありました。そのため、イベントの準備と同時に灯台内に溜まった水の排水作業を行うのが大変でしたが、当日は雨もあまり降らず、たくさんの方に灯台に訪れていただき、とてもよかったです。

五森祭の準備活動においては、来場者への灯台の案内や、来場者からの質問に答えられるよう、舞鶴灯台一般公開を担当する学生と一緒に勉強会を行いました。私は、ほかの学生に灯台について教えなければならぬ立場であるため、私自身も以前授業で習ったことの復習を行いました。多くの内容が、約1年前に習った分野であったため、いい復習の機会となりました。また、舞鶴湾内の灯浮標等についても学ぶことができました。

今回の五森祭が終わり、次は遠泳訓練、他にも早朝訓練等、たくさんの行事、訓練があ



舞鶴灯台一般公開



灯台に関する資料や動画の展示状況

ります。それが終われば、私たちは現場に出ることになります。現場に出ることに対し、自分の未熟さ、不安や焦りを感じることもあります。管制課程第1期全員で切磋琢磨し、励まし合いながら一人ひとりが、自分のなりたいたい姿になれるように頑張っていきます。

(管制課程第1期 本山陽菜)

第16回灯台フォーラムを開催しました！

一般会員 不動 まゆう

フォーラム概要

6月8日土曜日、横浜の万国橋会議センターにて「灯台フォーラム」を開催しました。今年で16年目となるこの集まりは、灯台ファンのための勉強会、情報交流会という位置付けです。灯台を文化的、歴史的、美的観点から見つめ、灯台をより深く学ぶことと、文化的な価値を新たに創出することを目的としています。今年には全国から103名の灯台ファンが集まりました。

基調講演は、親子2代で灯台守をされてい



写真-1 基調講演をされる鈴木照秋さん

た鈴木照秋さんにお話し、当時のご苦労や灯台守のお仕事の内容、日々の暮らしなどお話しいただきました。また灯台愛好団体である「ライトハウスラバーズ」の活動報告では2018年に行った「アメリカ西海岸の灯台巡り」について楽しい報告がありました。

その後はシンポジウム形式で「地域活性をめざした灯台活用」灯台を未来へ引き継ぐために」をテーマに9団体の代表者にご登壇いただき、これまでの取り組みや今後の課題について発表いただきました。それぞれの発表内容について報告します。

シンポジウム登壇者による発表内容

1、海上保安庁交通部企画課

まず海上保安庁交通部企画課の原海上交通企画官から「地域活性化に資する灯台活用に関する有識者懇談会についての報告」がありました。第4次交通ビジョン（平成30年4月、交通政策審議会答申）で、重点

的に取り組むべき事項として「灯台観光振興支援」が掲げられたことや、昨年の150周年の式典についての報告、2月から6月にかけて3回行われた有識者会議の内容やまとめについて報告がありました。灯台が廃止され、取り壊されることを恐れている灯台ファンにとって、一筋の希望のように感じ、海上保安庁さんがとても頼もしく感じられました。

2、燈光会

燈光会からは今井専務理事がお越しになり、燈光会の活動についてお話がありました。あらためて燈光会の事業について正しく認識をすることができました。

3、日本航路標識協会

つづいて日本航路標識協会の佐々木事業部長からは、3月に行った勝浦灯台の一般公開について、さらに室戸岬灯台の旧退息所の再利用計画についてお話がありました。勝浦灯台の一般公開は私も参加させていただきました。訪れた方々の溢れる笑顔を目にしたこともあります。日本航路標識協会さんのこうした取り組みにますます期待を持ちました。

4、日本ロマンチスト協会

日本ロマンチスト協会の柴田さんは「恋する灯台プロジェクト」として、これまでに認定された「恋する灯台」で、各自自治体が灯台を観光活用している具体例をあげてくださいました。美しいスイーツを灯台に見立てた「灯台パフェ」や、ロマンチックな写真の撮れるフォトスポットの提供、灯台でのプロジェクトアクションマップなど、各自自治体の方がさまざまなアイデアを出しになっていることがわかりました。

5、尾道海上保安部

昨年度まで尾道海上保安部で交通課長をされていた児島さんからは、「灯台めぐりツアー」について報告がありました。実施までの経緯や概要、課題のお話を伺いながら、私も参加させていただいた2017年9



写真-2 シンポジウムの様子

月の尾道の灯台めぐり「明治期灯台の五重奏」について思い出していました。（燈光の平成30年1月号にレポートを書いております）ツアー実施にあたっては大変なご苦労があったかと思いますが、それを上回る兒島さんの灯台への深い愛情を感じました。こうした方の情熱によって周りの人々がいい形で巻き込まれ、目標実現へのエネルギーとなるのだと実感しています。

6、志摩市観光商工課

そして昨年から始まった「灯台ワールドサミット」について、第1回目の開催地である志摩市より、観光商工課の岩崎さんにお話をいただきました。「灯台ワールドサミット」とは、灯台を活用した周辺地域の活性化と、灯台を後世に引き継ぐことを目的に自治体間でパートナーシップを築き交流するための催しです。昨年は銚子市、御前崎市、出雲市、志摩市の4市で「灯台活用推進市町村全国協議会」を設立しました。また灯台クルーズや町歩きなどのオプショナルツアー、有識者による講演やパネルディスカッションなどのイベントは、だれでも参加することができ盛況を博しました。志摩市では大王埼灯台、安乗埼灯台と登れる灯台が2基もあり、夜間公開や園地を活用してのパーティ

が行われました。私も参加させていただき、フグやアワビなど「食の宝庫」として有名な志摩市の特産品を楽しむことができ、また地域文化として安乗人形芝居を拝見しました。

7、御前埼灯台を守る会

来年「灯台ワールドサミット」を行う御前崎市からは「御前埼灯台を守る会」の斎藤会長が来年への意気込みをお話くださいました。御前埼灯台を守る会は「平成灯台守」として、連休や灯台記念日、毎日曜日に灯台資料館を運営していらっしゃいます。私も先日お伺いしましたが、資料館には御前埼灯台の歴史が網羅できる資料が展示されていてとても勉強になります。こうした「我が灯台を愛する気持ち」こそ、未来へ灯台を引き継ぐ上でもっとも大きな力になると思います。

8、犬吠埼ブランドン会

そして今年「灯台ワールドサミット」を開催する銚子市からは「犬吠埼ブランドン会」の仲田代表幹事がお越しになりました。ブランドン会はなんと20年間も活動を続けていらっしゃいます。これまでの犬吠埼灯台の保存と活動の報告、そして平成30年度文化庁助成

事業「犬吠埼灯台乙女養成講座」についてお話があり、11月9日、10日に行われる「灯台ワールドサミット」の内容についての予定を知ることができました。11月が待ち遠しいです。

9、塩屋埼灯台点灯120周年記念事業実行委員会

最後にご登壇いただいたのは「塩屋埼灯台点灯120周年記念事業実行委員会」の渡辺顧問と事務局の坂本さんです。震災を経てなお愛される塩屋埼灯台。今年には灯台が120周年ということもあり、様々な事業が企画されることになりました。活動経費についても詳細に発表してくださったので、今後同様の取り組みをしたと考える自治体の方にとっても参考になったのではないのでしょうか。現在、いわきの観光が抱えている課題と、その解決策に



写真-3 塩屋埼灯台点灯120周年記念事業実行委員会の発表

ついても発表がありました。

アンケート実施

会場では「灯台の観光活用活性化策」についてアンケートをとりました。「灯台の夜間公開」や、「灯台敷地内での宿泊」を実現した場合、参加したいと思うかどうかを5段階の評価で問うものです。日本航路標識協会さんにご協力いただき、取りまとめ集計をお願いしました。このアンケート結果と各登壇者の方が発表されたプレゼンテーション資料は、私が管理するHPにアップしております。ご興味を持っていただける方にぜひご確認いただきたいと思っております。「灯台どうだい？ホームページ」<https://toudai.freepaper.jimdo.com>

懇親会

懇親会は近くのパ



写真-4 懇親会での乾杯のご発声は玉宮孝さん

ーティ会場で盛大に行われました。東北、北海道、近畿や中国地方など遠方からも参加者があり、灯台ファン同士、灯台談義に花が咲き、大変に盛り上がりました。

まとめ

このように「灯台フォーラム」は、基調講演により灯台について学ぶことができ、さらにシンポジウムによって現在の灯台を取り巻く状況、取り組むべき課題や、今後の目標などを認識し、情報共有を図っています。

私がフォーラムの運営を任されてから6年が経ちましたが、(1回目から10回目まではライトハウスラバーズの山口代表が行っていました)年々参加者が増え(2014年41名、2019年103名)、女性や若い方の割合も増えていきます。毎回反省点も多く出ますが、来年もさらに楽しく面白く、灯台のためになる会を開催したいと思っております。

ご登壇くださった皆様、そして参加してくださった皆様、協力してくださった皆様ありがとうございます。灯台でございました。

灯台ワールドサミットin銚子について

灯台ワールドサミットin銚子実行委員会事務局

1 開催日程・場所

令和元年11月9日(土)

記念式典・交流会 絶景の宿犬吠埼ホテル

物産展・アトラクション・ブース展示 犬吠埼灯

台前園地

令和元年11月10日(日)

エクスカージョン 銚子市内

2 開催内容

次の4つの分野でイベントを開催します。

① サミット関係(記念式典・国際交流)

- ・ サミット宣言、基調講演(金沢大学・谷川竜一先生)、パネルディスカッション(参加自治体の代表者や講師など)

- ② エキスポ関係(物産展・アトラクション・ブース展示)
 - ・ 台湾桃園市との交流(白沙岬灯台の紹介)



灯台ワールドサミットチラシ

昨年11月に、三重県志摩市で「灯台を歴史的価値のあるものと捉え積極的な観光資源化を図ることで灯台の活用を促進し、もって歴史的灯台を次世代に引き継ぐこと」を目的とする第1回灯台ワールドサミットが開催されました。

このたび、第2回目となる灯台ワールドサミットを千葉県銚子市において開催することとなりましたので、紹介させていただきます。

・銚子をはじめとした参加地域の特産品の販売や参加自治体のPRブースの展示、音楽イベントなど。

③おもてなし（交流会・灯台夜間公開・エクスカーション）

・関係者同士の交流とPRを行う交流会

・灯台夜間公開（銚子海上保安部・（公社）灯光会様協力事業）

・犬吠埼灯台ほか市内の様々なスポットを巡る街歩き、銚子クルーズなど。

④次世代に向けた取組（出前講演・体験学習）

「企画趣旨」次世代を担う青少年に対し、灯台の価値や魅力を知ってもらうとともに、灯台の保存や活用方法について考えてもらう取組

・小学校での出前講演（「灯台どうだい？」編集長不動まゆう氏 11月1日（金）実施予定）

・犬吠埼灯台に関する絵や絵日記の作成・展示

・ラジオ工作教室（一財）日本航路標識協会・日本無線（株）様協力事業）

・明治期灯火（石油灯器・石油蒸発白熱灯器・アセチレンガス灯器）の再現及び一般公開（（公社）灯光会様協力事業）

灯台には歴史的・文化的価値が高く、周辺の景観と調和して、重要かつ魅力的な観光資源として活用されているものが多く存在します。犬吠埼灯台はその代表的な存在です。参観者数は10万人を超え、国の登録有形文化財に登録されています。また、旧犬吠埼霧信号所霧笛舎は、現存する最古の国産鉄鋼材を使用した建造物である、という点において大変価値の高い建造物であり、霧笛舎も国の登録有形文化財となっています。

灯台ワールドサミットin銚子は、

・灯台の文化的価値を評価し

・保全と活用を進め次世代へ引き継ぎ

・国際的にも価値ある観光資源としてどのように生かしていくか

これらの方法や可能性を探り、地域活性化の一助とするための情報・意見交換の場としたいと考えておりますので、多数の皆様参加をお待ちしています。



霧笛舎

明治の灯台の話(57)―

おおげしま 大下島灯台

灯台研究生

前代未聞の点灯開始

来島海峡の迂回路として、今も多くの船舶が行き交う三原瀬戸（布刈瀬戸）に、明治27（1894）年5月15日、灯台8基と灯標1基が一斉に点灯開始しました。明治期、9基もの航路標識が同じ日に点灯開始したのは、後にも先にも例がありません。異例のことです。その時の告示に記された9基の標識の構造等は、表のとおりです。

時期は日清戦争開戦（明治27年8月）の直前、前回の大濱灯台設置（同35年）の8年前になります。また、大濱灯台と同じ来島海峡に立つ中渡島灯台（同33年）の6年前になりますが、計画では、この中渡島灯台が、三原瀬戸の9基の標識より先に設置されるはずでした。明治17年8月25日付官報第三二二一号に掲載の工部省報告、藤倉見達（当時の灯台局長）の視察報告の中

| | 9 | 8 | 7 | 6 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 | 標識名称 | 構造 | 地上高 | レンズ等級 |
|--|--------------|--------------|--------------|--------------|--------------|--------------|--------------|--------------|--------------|------|----|-----|-------|
| | 長太夫灯標 | 大下島灯台 | 中ノ鼻灯台 | 蘇崎灯台 | 大久野島灯台 | 高根島灯台 | 小佐木島灯台 | 大浜崎灯台 | 百貫島灯台 | | | | |
| | 石造円形 | 石造八角形 | 石造円形 | 石造円形 | 石造円形 | 石造円形 | 石造円形 | 石造円形 | 石造円形 | | | | |
| | 2.2丈 6.7m | 2.5丈 7.6m | 1.2丈 3.6m | 1.2丈 3.6m | 1.6丈 4.9m | 1.2丈 3.6m | 1.6丈 4.9m | 2.1丈 6.4m | 2.5丈 7.6m | | | | |
| | 無等不動 | 五等回転 | 無等不動 | 無等不動 | 無等不動 | 無等不動 | 無等不動 | 無等不動 | 無等不動 | | | | |

三原瀬戸（布刈瀬戸）の8灯台1灯標

で、灯台の設置場所の測量に関する中渡島の項目に次の記述が見られます。

○中渡島 神戸馬関の間に三線の航路あり 一を三原海峡に由るものとし 二を久留間海峡に由るものとし 三を来島海峡に由るものとし 就中 三原海峡は潮流急激ならず湾曲迂回 他の海峡に比すれば其の里程最も長し 三菱會社の汽船は多く此の航路に由ると云ふ 是蓋し里程の遠きも潮流の急激な

らざるに由るものならん 久留間海峡は海路頗る險悪 航海者極めて寡なし 来島海峡は海潮激流なれども 航路最短にして且湾曲せざるを以て 此の航路に由るもの最多しと 然れども第一第三の航路孰れに由るも 月明の夜に非ざれば進航すること能はず故に 此の二路の一に燈標を設け 船舶をして夜航することを得せしめば 其の便利実に小少ならざるべし 右二路の内孰れか設燈に適當なるかを熟考するに 三原海峡は潮流急激ならざるも狭長にして 屈曲せり 此の海峡に燈標を設けんと欲せば 地角毎に燈標を要し 其の費用頗る多し 之に反して来島海峡は其の間最も短きを以て 僅々二三の燈標を設けば 其の目的を達するを得べし 因りて此の瀬戸に燈標の位置を擇まんと欲し 瀬戸の中央なる中渡島に上り 其の西端を点検せしに 此の地適當の位置に在り 故に此の地に一燈を設け 赤色の光線を以て 暗礁鴻の瀬を示し又 津島の南端に一燈を置き 以て峡門を標せば 暗夜と雖も容易に此の海峡を通航することを得べし

三原瀬戸をはじめ三つのルートの特徴が示され、三原瀬戸は航路が湾曲迂回し最も長い距離だが激流は少

なく、来島海峡は距離は短く激流だが通航量は最も多いとされています。そして三原海峡に標識を設置しようとするば、

地角（岬）ごとに必要なため高額になるが、来島海峡は、航路は短く2、3の標識で十分であることから、同海峡内の中渡島を測量し、同地が標識設置の最適の地と報告されています。しかし、報告された10年後、中渡島ではなく、通航量が少なく設置費用が多額の三原瀬戸が優先されたのです。しかも前代未聞の一度に9基という標識が設置されています。なぜ、このような措置が取られたのでしょうか。

日清戦争の意外な実態

まず考えられるのは日清戦争による設置です。灯台



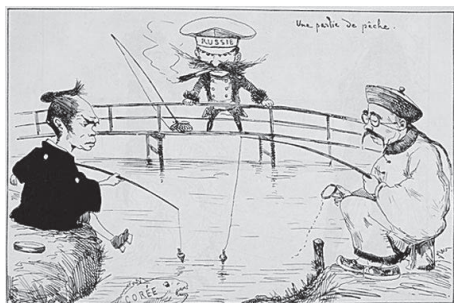
瀬戸内海の3つのルートと三原瀬戸の9基の標識の位置

の点灯開始後すぐに、日本と清国が朝鮮の支配を巡って戦争を始めます。前回の大濱灯台のように、日露戦争前に、艦船の通航のため海軍から設置要望書が出ていたように、日清戦争が関与していることが容易に考えられ、当時の記録や関係書類を調査しましたが、関連の記載が全く見付かりませんでした。当時の新聞を調査すべく広島県立文書館もんじょにて、標識の工事期間中となる明治26年11月〜同27年5月までの芸予日日新聞と中国新聞の記事を調査しましたが、こちらも残念ながら標識設置に関する記事はありませんでした。意外なことに、日清戦争前の新聞記事には、日露戦争前のような危機迫るものや戦争に対する異様な緊張感が伝わる記事が全く見られませんでした。関係記事は、甲申事変（日本の援助を受け起きたクーデター）の首謀者金玉均が、上海で暗殺された事件が連日大きく取り上げられているぐらいで、本当にこのすぐ後に戦争が起きるとは信じられない程でした。改めて日本史事典三訂版（旺文社）を見ると、日清戦争の解説には次のとおり記されていました。

明治政府の朝鮮に対する積極政策は征韓論に始まり、一八七五年の江華島事件後に結ばれた日朝修好条

規によって朝鮮を開国させた。一八八四年の甲申事変で日清両国の対立が激化したために天津条約を結んで、両国軍の撤兵が実現したが、一八九四年（明治二十七年五月）甲午農民戦争（東学党の乱）が起こり、清国が朝鮮政府の要請により出兵すると、それに応じて日本も六月出兵。日本の朝鮮内政改革の提案を清国に拒否され、両国軍は漢城（現ソウル）・牙山で対立し、ついに九四年七月豊島沖ほうとうで衝突がおこり、八月一日、日本は清国に宣戦布告した。↘

日清戦争は、日露戦争のように三国干渉後、戦争の機運が年を重ねて徐々に高まり起こるべくして起きた戦争とは、どうも違うようです。柏書房の明治のもののはじまり事典には、福沢諭吉が主宰する時事新報の



フランス人ビゴアの風刺画
魚（朝鮮）を釣る日本と清、横取りを狙うロシアの当時の各国の関係を風刺したもの

明治27年5月30日付で、「朝鮮の東学党の騒動は、他国のことではあるが、日本の利害のためにも見過ごしてはならず、援軍の要請があれば出兵すべきだと主張している」と記されています。日清戦争を引き起こすきっかけとなった東学党の乱は、朝鮮半島内の内乱で、日本からは対岸の火事でした。この内乱の鎮圧に日本が朝鮮半島に赴いたのは、三原瀬戸の標識点灯開始後の明治27年6月です。三原瀬戸の標識は、日清戦争の兆候すら見られない時期に設置が決められ工事を開始し、点灯開始した時にはまだ戦争が起きる気運すらなかったのです。以上の状況から、三原瀬戸の標識は、日清戦争がきっかけで設置されたものとは、ほとんど考えられません。

その事実を思わせる記述が、明治37年3月に航路標識管理所が作製した灯台写真集「燈台要覧」に記されています。三原瀬戸（布刈瀬戸）の標識の一つである大浜埼灯台の説明には、次の記述が見られます。

布刈瀬戸は播防両洋の間に於ける航路にして 其間群島暗洲散在し 且つ急潮奔騰するを以て 暗夜に際しては航海者 方針を定むるに苦しみ 空く天明を俟つて通航し 船舶の常に不便を感じたる所なるのみな

らず 一朝有事に際し 我軍艦の機を失する虞なんとせざれば 夙に燈標設備の必要を認めたる所なり 明治廿六年其の計画漸く成り 布刈瀬戸航路標識として 百貫島、大濱埼、小佐木島、（省略） 此等燈標の設備成つて彼此前後燈光映照し為に 前日の如き不便を除去したるのみならず 現に廿七八年の役の如き 我軍艦の此航路を経由するものに向つて 大に便益を与えたり

日露戦争の開戦直後に製作された燈台要覧の記述には、布刈瀬戸の標識は日清戦争に大に便益を与えたこと記されていますが、最後に付け足されたような記述で、本文の扱いではありません。戦争への関心が頂点に達していたこの時期、三原瀬戸の標識が、勝利した日清戦争のために設置されたものであったなら、もっと誇張して書かれていたのではないのでしょうか。

それでは一体、何の理由で、メイン航路の来島海峡を差し置いて、三原瀬戸を優先し9基もの標識が設置されたのでしょうか。

日本郵船の挑戦

三原瀬戸（布刈瀬戸）の標識の工事記録は、明治27

年度の報告となる通信省第九年報の航路標識工事の報告に記されています。明治26年10月22日に開始され、点灯開始は前記のとおり同27年5月15日ですが、竣工は7月4日と記されています。灯台が点灯を開始したのは、工事完成の2ヶ月前です。点灯開始が、灯台の完成を待たず急いでいたかのようです。ちょうどこの時期、当時の芸予日日新聞と中国新聞には、連日大きく取り上げられている記事があります。山陽鉄道の三原〜広島間の開通です。工事開始は、明治26年1月、完成は同27年5月、開通は6月10日と、まさに三原瀬戸の標識設置時期とびつたりです。そして同期間、山陽鉄道と定期航路の客の争奪戦の記事も、紙上を賑わしていました。

●山陽鐵道汽車賃の半減 例年一月は巖島神社(宮島)柿の本人丸神社、湊川神社、宗忠神社其他社寺の参拝者多きを以て 山陽鐵道會社にては 参拝者の便を計り 来月一日より十五日まで神戸三原間全線各駅の賃金を半減にする筈なりと

明治26年12月28日付 芸予日日新聞

●汽車と汽船の競争 山陽鐵道工事の様子は 時々報道する處なるが 愈々全工事落成の暁は 全社落成税として 一ヶ月間広島神戸間の下等賃金を六十銭に引下げる由にて 大阪通いの各汽船主は 其際下等乗船賃金を三十銭とし 尚酒一本宛を膳部に添へ 山鐵に劣らず人気を取らんと今より意気込み居ると云う

明治27年4月24日付 中国新聞

これらの事実から、鉄道開通に対抗する海運業界の存亡をかけた、三原瀬戸への標識設置要望も考えられ

山陽鐵道 旅客半減
二月六日(舊正月元日)より
十五日間施行

廣告

| | | | | | | | | | |
|---|-----|-----|-----|----|-----|-----|----|----|----|
| 縣 | 上平山 | 上長谷 | 長谷川 | 林崎 | 下森崎 | 下池田 | 上金 | 上金 | 上金 |
| 甲 | 甲 | 甲 | 甲 | 甲 | 甲 | 甲 | 甲 | 甲 | 甲 |

手然ノ散免ガル可カラザル電ナリ交ノ限レアリトナリ

農ハ國ノ大本ナリ農能ク耕サレバ國衰ラフルハ
手然ノ散免ガル可カラザル電ナリ交ノ限レアリトナリ

明治27年2月5日付 芸予日日新聞

全六平専山船六平
何卒
明治ノ原發毎

ますが、大きな矛盾がありました。山陽鉄道への対抗措置ならば、わざわざ大回りとなる三原瀬戸への標識は、あまり意味がないことです。対抗するルートとなる三原―広島（三原）の定期航路は、寄港地が、糸崎（三原）、忠海、竹原、阿賀、音戸、呉、宇品（広島）など広島県の本州側を經由するルートで、三原瀬戸の島々を巡る大回りのルートではないのです。

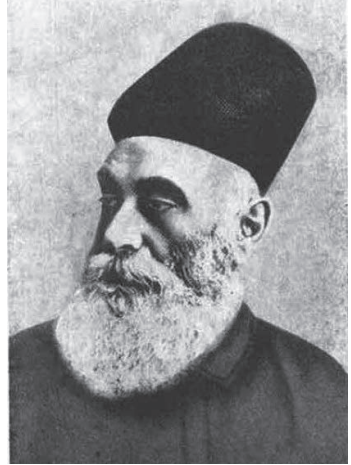
瀬戸内海の商船会社は、明治10年の西南戦争による輸送需要の増加に伴い、70社以上が誕生し、その後、各社間の対立を繰り返して、同17年5月、船主55名と船舶93隻からなる大阪商船会社（後のMOL）が発足します。20年代に入っても、群雄割拠する内航汽船の競争は激しさを増し、それに伴い海難が頻発し、明治25年6月に海上衝突予防法が制定されます。この流れを受け、航路の安全と海難防止を理由に、三原瀬戸への標識設置も十分考えられますが、危険性の観点では三原瀬戸より来島海峡の方が高く、航行の安全を重視するならば、通航量も多い来島海峡の標識設置が優先されたいはずで

す。そんな中、日本の産業の発展を担う新規航路が、瀬戸内海を經由し開設されます。明治26年11月7日、日本郵船による日本初の遠洋定期航路、神戸―ボンベイ

（インド）定期航路の開設です。明治政府の殖産興業の保護育成を受け、繊維産業は当時の日本の代表的な産業に成長し、国産の綿花だけでは足りず、中国、インドから大量の綿花を輸入していました。特に良質で廉価のインド産の需要が増していましたが、インド―日本の航路は、英国P&O汽船、オーストリアのロイド社、イタリア郵船の三社に独占され、割高の綿花が供給されていたのです。この外圧を打ち破るべく、国内の繊維業界と日本郵船とインドのタタ商会が価格等の契約を交わし、神戸孟買の定期航路が開設されたのです。航路開設後は、P&Oらの不当な価格引き下げによる損失にも耐え、2年半の攻防の末、同29年7月にP&O汽船らが妥協し、日本郵船と同一条件で各社の船舶が利用できることとなり、その後、日本の繊維産業は飛躍的な発展を遂げていくのです。

日本郵船50年史を見ると、新規航路開設前に、日本郵船とタタ商会は、次のような取り決めを交わしていました。

P&O汽船等三社の強固な地盤に割り込むときは不測の失敗を招くおそれがあるので、まず航路開設の場合、紡績業者から幾ばくの積荷保証が得られるか確か



ジャムセット・ジー・エヌ・タタ
(日本郵船50年史より)

め、一方タタもボンベイに帰り、同地荷主と交渉して積荷保証を獲得し、しかる後当社及びタタ商会各一隻都合二隻をもって、日本ボンベイ間六週一回の定期航路を取り決めた。

日本郵船の新規航路の失敗は、国内の繊維産業のみならず、インドの豪商タタ商会、そして明治政府にも多大な損害を及ぼすものでした。日本郵船は当時、明治政府の助成を受け、国の管理下で日本の海運を牽引していました。明治の日本の産業の発展のため、外圧を退け日本の海運を世界へと切り開くため、明治政府の後押しを受け、ボンベイへの定期航路は日本郵船の大きな挑戦であり、失敗は許されなかったのです。

日本郵船の明治政府の管理機関は、通信省官船局です。灯台を管理する航路標識管理所も官船局に所属していました。前記の通信省年報には、航路標識管理所の年度報告とともに日本郵船の事業報告も記され、計画を含めた様々な情報は共有されていました。

失敗は許されなかった神戸―ボンベイ間の定期航路は、瀬戸内海においては来島海峡を避けて安全な三原瀬戸を通航したことが容易に考えられます。日本郵船の前身である三菱會社は、来島海峡は通らず三原瀬戸を通航していた実態が、冒頭で紹介した官報に掲載の藤倉見達の視察報告の中に特筆されていました。

以上の当時の記録から、メイン航路の来島海峡より三原瀬戸の9標識が先に設置されたのは、日本郵船の日本初の遠洋定期航路開設が要因のひとつではなかったのかと考えられます。

ちなみに、明治26年度の報告となる通信省第八年報の航路標識建設等の報告には、三原瀬戸(布刈瀬戸)の工事報告が次のとおり記されています。

該所は 航通不便の孤島にして 殊に當時^{どうじ}天候不穩の時季に際したるを以て 風浪高く 建築材料の運搬並びに工夫の來往し得ざる日 甚だ多く 加ふるに建

設置位置の地質堅硬のため、之を開鑿するに予定外の日子を費やしたる等にて、二十七年三月三十一日までには全部落成点火するに至らず、然れども概して九分通りの竣工を示せり

前記の逡信省第九年報の報告では、灯台の点灯開始が竣工の2ヶ月前で、急いでいたようだとしましたが、第八年報からは灯台の完成も26年度内に終わらせる予定であったかのように読み取れないでしょうか。

三原瀬戸の標識の設置は、明治の日本の行く末を担い、ボンベイへ向けて航行する船に、少しでも早く光を届けようと急いでいたように愚生には感じられます。

前代未聞の石造八角形の灯台

明治27年の逡信省告示第百五号にある、大下島灯台の点灯開始の告示は次のとおりです。

大下島燈臺

- 一 該燈臺ノ位置は、愛媛県伊豫國越智郡大下島の西端にして、北緯三十四度十一分十四秒、東経百三十二度五十五分五秒に當る

- 一 該燈臺は、石造八角形にして白色に塗り、第五等回轉白色の燈明を設け、其高さ基礎より燈火まで二丈五尺五寸なり

- 一 該燈火は、真方位南四度二十分東より、北六度十分東まで、百九十度三十分間に於て、二十秒時毎に一閃光は発す

- 一 該燈火は、水面より高さ十一丈一尺五寸にして、其光達距離は晴天の夜十六海里とす

告示にもあるとおり、大下島灯台は、石造八角形の構造です。石造八角形の灯台は、明治期は大下島灯台だけです。大正期の若宮灯台と合わせ、日本には2基しかありません。コンクリート造やレンガ造に



在りし日の大下島灯台と退息所
(燈光会保管写真より)

は、八角形の灯台は珍しくはありませんが、石造灯台はほとんどが円形で、四角形や六角形がわずかにあるだけです。大下島灯台は、点灯開始当時は前例のない前代未聞の石造灯台でした。

では、なぜ大下島灯台だけ、石造の八角形で造られたのでしょうか。なぜ多くの石造灯台は円形で造られているのでしょうか。

灯台の構造に関しては、明治17年5月刊行の工部統計志「燈台之部の燈塔の形状の説明（200頁）」の中で、次のとおり見られます。

形状 圓塔あり方塔あり六角塔八角塔等あり 各地取用の材質 工業の便否 又は内部構造の模様に因り 又は一目して其の燈臺たるを知らしむるに便するためにし其形状一定ならず

大下島灯台は、冒頭の8灯台1灯標の整理表でも分かるのとおり9標識の中で唯一の八角形の構造です。位置は、三原瀬戸の西側の玄関口です。反対の東側の玄関口に位置する百貫島灯台と高さは同じですが、整理表を見ても一目瞭然の如く、大下島灯台の八角形は、三原瀬戸8灯台においてその灯台を知らしむるに便宜

を与えています。三原瀬戸の周辺は、良質で豊富な石材の産地が散在しています。明治期、前代未聞の9標識の同時設置であるが故、前代未聞の八角形の石造灯台が誕生したのではないのでしょうか。

円形灯台が多くある理由は、大正3年8月発行の石川源二著の「燈臺」の燈塔の設計の部に次の説明が見られます。

燈臺燈塔に作用すべきものは、風又は波にして、之が設計上転倒防止として、燈塔の重量を加うるも、風力又は波力の合力は、基礎の一方に偏するものなり。

燈塔は、多く岬角の地にありて風力強きを以て、一平方呎に付六十封度、圓形表面は、投射面一平方呎



大下島灯台と百貫島灯台の位置図



八角形の大下島灯台
(平成31年4月撮影)

に付三十五封度以上を必要とす。

灯塔に作用する風又は波に対する面積あたりの強度が、円形の灯台は、平面のある灯台に比べ、約半分程度で済むことが、この説明から確認できます。大下島灯台は、数値上では大きな灯台ではないですが、近くで見ると重厚な石積みからくる威圧感と、異様な大きさを感じさせる灯台です。

桜の絨毯

燈光昭和32年6月号に掲載の瀬戸内の灯台めぐりの記事に、職員や家族が居た頃の大下島灯台の様子が次のとおり見られます。

正午。空は晴れてきた。前面に白亜の大下島灯台が見える。日の丸の国旗があがっている。

島陰の船着場につく。鳥越所長をはじめ、所員の方の御出迎えをうける。灯台への道は、清掃された山路であった。彼岸桜がさいていた。

紅梅が三株満開で、その下には、水仙が咲き乱れている。

紅梅や 灯守る人に 迎えられ

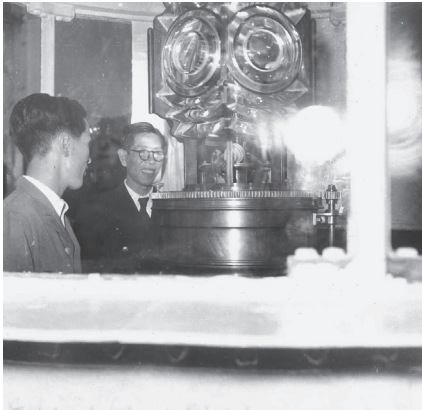
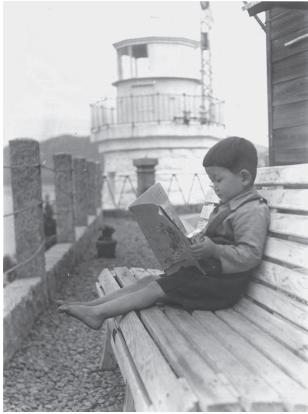
事務所に立てば、安芸灘は春光に輝いていた。

我々がこれから訪れる四国今治は、霞の中に沈んでいる。

灯台は、五等閃光レンズでパリーモードであった。

六十七年前、遙々花のバリーから我国に運ばれた珠玉であった。幾年月磨きに磨かれて、その精彩は灯室の空間を輝かしていた。

我々が辞去するとき、奥様方もお見えになり、梅の香の灯台道を下った。乗船して、我々は再びいいねいにお別れの御挨拶をした。「明星」はすべり出した。我々は手を振った。陸の人達も手を振っている。感情がせきこめてくる。人と人との離別する貴い一刻であった。船は灯台の鼻を曲がった。灯台の人達は見えなくなっていた。我々は白亜の灯台を松のみどりのうえに仰



昭和25年6月の大下島灯台視察の全容
(灯台研究会 畑矢健治様提供)

いだ。やがて大下島の灯台は、ともに遠ざかっていった。

大下島灯台は、昭和33年に今治航路標識事務所へ集約管理されることから、大下島灯台に人が居たときの最後の貴重な記録です。鳥越所長は大下島灯台の最後の灯台長でした。今は無き設標船「明星」による第六管区内の灯台視察の一コマですが、視察を終えた各地の灯台では、視察船に別れを惜しむ灯台職員家族と、船上の視察職員らの涙の別れが繰り返えされていました。

今年4月の早々に、愚生も初めて大下島灯台を訪ねました。今治から高速船で45分、高速船の船着場から歩いて約15分、人影も何の音もしない、集落から離れていく淋しき道を灯台へと向かいました。かつての灯台の船着場を過ぎ、灯台へと続く山路は、散った桜の花びらで見事な桜の絨毯じゅうたんになっていました。

また退息所の跡も桜の木々に覆われて、灯台の周囲は桜の園に変貌していました。昭和40年に映画の撮影で大下島に訪れた森繁久彌氏を称えた記念碑が、同地に建立され（燈光平成22年2月号「森繁久彌氏と今治の灯台」に建立の経緯が掲載）、想像していた殺風景

な風景とはまったく異なりました。

この桜の園から眺める、重厚な白亜の石造灯台と穏やかで美しすぎる三原瀬戸の風景には圧倒されました。パリーモードと称された五等閃光レンズは、今は取り外され、LED灯器になっている現状は、桜の園からも確認できました。

そのレンズに吸い寄せられるように、7月最後の日曜に、再び大下島を訪れました。平成29年にLED化され、取り外されたレンズは、現在、大下島の集会所で保管されていることを偶然知り得たからです。ちょうど、大下島灯台も撮影されている長澤まさみ主演の映画「嘘を愛する女」を見たすぐ後でした。

五等六面のパリーモードの閃光レンズは、確かに大下島の集会所の部屋に鎮座していました。昭和32年の



大下島灯台旧五等閃光レンズ
(大下島集会所にて保管)

視察の際、磨きに磨かれ灯室の空間に精彩を放っていた輝きは今も健在でした。

レンズの台座には、SAUTTERHARLE&CIE（インターハーレー社）PARIS 1893と確かに刻印されていました。案内していただいた島の自治会長を務める皆川嘉男様に、灯台へ続く道の脇に灯台の井戸があったこと、その近くに灯台塗装用の消石灰の焼き場があったこと、灯台の視察船から荷下ろした物資を村の人達が運んだことなど、記録には見られない話を聞かせていただきました。また、燈光平成9年1月号に掲載の大下島の幽霊にまつわる石碑や海岸見張所へも案内していただき、映画に出ていた島の南端のアゴノ鼻灯台まで送っていただきました。大下島は江戸期、政治犯の流刑の島で、島の生活様式や風習に、武士の習わしが多く残されており、磯辺の貝採りなどは拾い物と嫌い、漁をすることも伝統的に行われず、今日までずっと農業が主要産業であった島の知られざる事実を直接お伺いしました。

今、島に住んでいる方は70名程度とのことですが、関前村史（平成9年3月発行）を見ると、灯台が出来た明治初頭には、600名以上も居たとされています。灯台に人が居た頃は、多くの島民と日常的に交流し、

人と島とのぬくもりのある光景が燈光や当時の誌面に描写されていますが、今ほどの島も灯台と同じようにさびれた淋しい現実を目の当たりにします。灯台があるどこの離島もおなじように、子供は一人も居らず、学校は廃校で建物だけが残され、高齢者のみが居住する島がほとんどです。いつの日か、この島も灯台のようにながなくなってしまうのでしょうか。その時もパリーモードのレンズは、集会所に鎮座しているのでしょうか。真夏の日差しが照り付けるアゴノ鼻灯台で、日影で汗をぬぐいながら、しばし時を忘れて、そんな余計な心配をしながら、沖行く船をボーッと眺めていました。

今回、大下島島内を案内いただきました皆川嘉男様並びに大下島灯台の視察時の写真を提供していただきました畑矢健治様に対しまして、改めてこの場をお借りしお礼申しあげます。

樺太中知床岬灯台最後の灯台守・降籐利勝さん
—— 敗戦後サハリンで過ごした僕（長男）の少年時代 降籐信捷さんの手記（抜粋）

手記 降籐 信捷（ロシア語）
翻訳 小山内道子

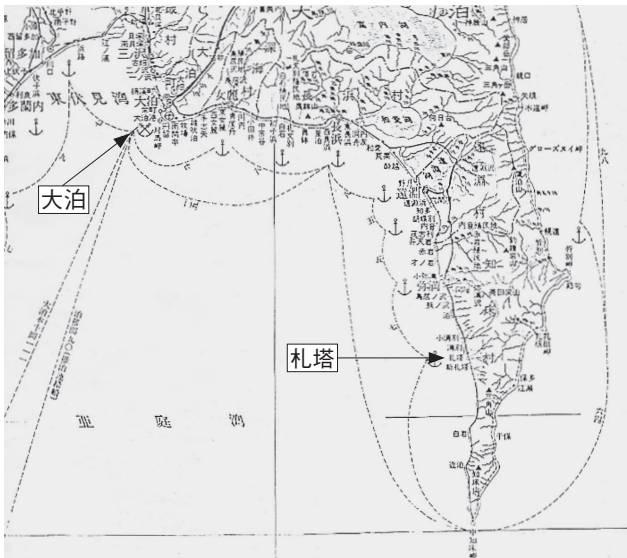
第2回

終戦直後の父の仕事 —— 厳しかった時代

（1945年～1950年頃）

家族を養わなければならぬ父にとっては厳しい時代でした。まず、家族を食べさせるために働いてお金を稼ぐ必要があります。父はロシア語の勉強を始めていました。しかも、勉強を非常に一生懸命やっていた。辞書を頼りにまったく独力でやっていたのです。村にはロシア語を勉強するためのいかなる学校もありませんでした。非常な努力の結果は実を結びました。父は何とかロシア語を読んだり、書いたり、話したりできるようになったのです。

住んでいたユージヌイ（札塔）村は漁村でした。父は魚の加工をしようと考えましたが、家にはそのため



日本時代の樺太の地図（札塔＝サハリンのユージヌイ村）

の道具など何もありませんでした。日本人の漁師が置いていった大きな樽型のナベが数個あるだけでした。

このナベで肥料用魚のスケソウダラ、カレイ、カジカ、サメなどをゆでて農用肥料の魚粕をつくるのです。

最初ゆでた魚をワラのムシロに広げて、海岸に持って行って、干します。干し上がると、それを紙袋に詰め、倉庫に保管しました。父は最初の頃、この加工所で現場主任として働きました。魚粕の他に魚の油を造りました。油は200リットルの桶に集めていました。夏の間は400リットルまで作りました。

夏休みには、僕たちはずっと父が魚粕を作る手伝いをしました。お天気の良い日に、海岸にむしろをならべて、その上にゆでた魚をひろげて絶えずかき回すのです。それは魚が平均に速く乾くようにするためでした。そして、夕方にはそれを全部集めて倉庫へ運びました。

村には、また、桶製造工場がありました。そこへ行って買い付けした桶を集め、まだ半製品の桶をころがしながら運んできました。それから、たがを作つて、桶にはめていきます。その工程はやさしいものではありませんでした。

この樽にマスやニシンなどの魚を塩漬けにしました。盛漁期が終わると、父もこの塩漬けの作業所で働か

ざるをえませんでした。この頃父はこの慣れない仕事にすっかりくたびれて帰ってくるのでした。

この困難な時代には、「窃盗」は厳しく罰せられました。僕が両親の話から知ったことですが、一人の日本人がある夜、魚を一匹持っていたことで監視人に咎められました。そして逮捕され、その後起訴されました。その日本人は父に「助けてください！お願いします！」と哀願しましたが、父はどうすることもできませんでした。その人は結局「国家の財産を掠奪した」の条項で、刑務所に入れられました。それは日本人がまだ村に住んでいたころでしたが、彼は刑務所に入っていたため、日本人引き揚げの時、一緒に祖国に帰ることは出来ませんでした。

春、盛漁期が始まると、漁師たちはマスを大量に持ち帰っていました。しかし、魚類の加工工場で作業主任として働いていた父は、一度も、一匹の魚さえ家へ持って帰れませんでした。真の日本人として父は、決して他人のものは取らないという信条を貫いていたのです。そのことは父の血の中に流れていました。

春のそんなある日、わが家でちよつとした騒動が起きました。母が父に「家には子供たちに食べさせるものが何もない、工場には魚が溢れるほどたくさんあ

るといふのに、家に一匹も持ってこれないの！」と怒ったのです。この喧嘩の後、もう夜になっていました。父は工場へ出かけていきました。そこには夜警がいたのですが、父は夜警に妻の不満を話し、家庭の状況を説明したでしょう。父は2匹のマスを持って帰ってきました。

村の生活―薪取りのことなど

今になってあの当時の生活を考えたり、思い出したりするのは難しいような気がしますが、印象に残っていることを書きます：

電燈はありませんでした。夕方になるとランプをつけてますが、ランプはホヤにすすがたまるので、毎日拭いて磨く必要がありますからたいへんでした。

料理を作るにはベチカを焚きますが、それには薪がいります。木をノコギリで切つて、割るのです。それは全部自分の手でやらなければなりません。というのは、その頃電動ノコギリはなかったからです。わが家では、いつも薪があるわけではありませんでした。

もちろん、夏の間は森で枯れ枝や粗朶を集めたり、春の嵐の後は、流木や軍が投げ捨てた板や箱、その他何やかやを海岸で拾ってきていました。この他に、薪は

冬の間にも作る必要がありました。山を越えて遠くまで行つて、立ち枯れた木を切つて、まるで馬につけるように丸太を積んだそりを引つ張つて自分で運んでくるのです。僕は何回も父と一緒に薪を取りに森へ連れて行かれました。

冬道はいつもよりずっと長いのです。最初は谷間のような山の窪地を歩き、そこからどんどん高い方へ登つて行きます。自分でそりを引つ張りながら谷間の低地を2キロくらい歩いて、そこから一つの山を越え、また次の山へと登ります。僕たちのそりは二つの部分から出来ている特別なそりで、そりの後ろの部分はそこに積む丸太の長さに応じて長さを調節できるようになっているのです。

こうして最後のヤマを登つて頂上まで行つた時、僕は初めて反対側のもう一つの海、オホーツク海を見たのです。そこは生命がないような冷たい海に見えました。ただ波が寄せて来てごつごつした海岸の岩に打ち付けていました。

山へ登るのは大変でしたが、荷そりを引いて山を下るのは、もつとたいへんなことでした。山を下りる時、父は切つた木を乾いた枝ごと全部そりの後ろに縛り付けました。これがちょうどブレイキのような役割にな



ユージヌイ村時代の唯一の写真
ロシア人のジャーナリストが撮ってくれました
(兄弟姉妹はまだ5人・中央が僕)

るのです。薪を積んだ荷ざりは山のふもとへとスピードをあげて下ります。まるでスピードの出る自動車が後ろに雪の竜巻の帯を噴き上げながら走っていくようです。こうして荷ざりは前方の障害物にぶつかるか、バランスを崩してひっくり返らない限りすごいスピードで下って行きます。僕たちはそりが残した跡を追って下りていきますが、たいていそりが雪上にひっくり返っているのに行き当たりました。その時はブレーキに使った枝のたくさんついた木を取り外して、もう一度

最初から薪を積み直さなければなりません。こうして無事平坦な道に出たら、父は荷ざりを引き、僕はそれを後ろから押して家へ戻りました。時々、冬にペチカにくべる薪のたくわえが無くなって家が寒くなってしまうことがありました。そういう時、僕は母に

僕が大きくなったら、森に行つてたくさん木を切つて、大量の薪を作り、常に薪があつて家が暖まっているようにすると話していました。多分こういう言葉を聞くのは母にとって、嬉しいことだったと思います。

母について

僕の母は、1914年10月20日、長野県南安曇郡穂高町で生まれました。結婚前の名まえは小川ようでした。母は中産階級の家系の出身です。母は兄弟姉妹がたくさんいる子沢山の家庭で育ちました。母のお父さんは写真家でした。ですから家には母の家族写真がたくさん残っています。お祖父さんの写真館は現在も昔ながらに営業しています。今の所有者は小川吉、僕の従兄弟になります。写真館は町役場の向いにあるそうです。母は高校をクラスの優等生として卒業しました。僕のところには今でも母の通信簿があります。母の時代には教育を受けるのは容易ではなかったといえます。と言うのは授業料を払わなければならなかったからです。それに母の家ではいつもお金に苦労していたのです。四六時中お金足りなかったのです。ちょうどその頃、母のお父さんは家を、つまり写真館を新築することに決めました。建築には莫大なお金が必要でした。

そこで、建築のために借金をして、家を抵当に入れた
そうです。時々学校に払うべきお金がないことがあり
ましたので、母は泣いていたそうです。

父のところへお嫁に行つて、人家のない場所にある
灯台に住むことになりました。そして、次々に転勤で
移動していました。灯台のある場所には、子どもたち
の教育のために行かせる学校もないこともありまし
た。僕は、どんな境遇でも子供たちが勉強できるよう
にと、両親が自分たちで作った教科書を見たことがあ
ります。とにかく、夫がどんなところへ行かされても、
母も行くのですから容易ではありませんでした。母は
生涯を通じてずっと主婦であり、子沢山の家庭の母親
でした。僕たちの家族には8人の子どもがいたのです。
しかも僕たち全員に着るもの、食べるものが必要でし
たし、僕たちの洋服やおむつを洗濯し、身体を洗って
あげる等々もありました。母はほとんどどこへも出か
けませんでした。ただ家に居て、家事をこなし、庭の
畑をやっていました。戦後ながいことロシアで暮らし
ましたが、母はちゃんとロシア語を話せるようにはな
りませんでした。一体いつ、母に勉強する時間があつ
たでしょう？母はいつもいつも忙しかったのです。

これは滅多にないことでしたが、お祭りや祝日の日



結婚前のお母さん

など、どこかへ外出するときに晴着を着ることがあり
ました。美しい日本の着物をしきたりどおりにきちん
と着て、お呼ばれに行きました。その光景は、何か思
いもよらぬ見世物のようでした。この村の生活で、美
しい派手やかな着物を着た日本女性が通りを歩いて行
くのを見るのは、普通ではない不思議な出来事でした。
母はたった今、日本の映画フィルムから飛び出してき
た女優さんのようだったのです…

このよそ行きの着物を着て歩いて行くとき、母はきつ
と自分の故郷を、両親や兄弟姉妹を、日本での少女時代
の生活を思い出していたことでしょう。母はまだお嫁
に行く前に縫った着物を他に何枚か持っていました。

その後の父の仕事

父の仕事は札幌村の学校の経理主任でした。大体1

950年頃から父は学校の経理主任として働き始めました。また、この頃僕たちの家にはラジオ回路によるラジオ放送のラウドスピーカーが設置されました。ラジオはロシア語のニュースを放送していました。わが家にはまだラジオ受信機も、電気もありませんでした。

父は経理主任の仕事の他に清掃人の仕事も引き受けました。学校の建物全体の床を洗うのです（ロシアでは床を拭くというより、水をつけたモップで洗う―訳者）掃除のためにはバケツを引きずりながらやるのですが、バケツの水は川から汲んできます。いつも10回以上も汲まなければなりません。学校は大きくて教室がたくさんありました。僕たち子どもも夕方はいつも教室の掃除を手伝いました。僕たち子どもも掃除人として登録されていたのです。僕は父が床用モップを作っていたのを覚えています。というのは、当時店でモップを買うことは出来なかったからです。

冬になると、ペチカの火を焚く仕事もありました。授業が始まる前に各教室が暖かくなるように、朝早く行ってペチカを焚くのです。といっても、教室がいつも暖かいとは言えませんでしたので、生徒は皆休み時間になると、ペチカのところへ走って来て、凍えた手や身体を温めていました。

父はその他に建築の仕事もしなければなりません。学校のグラウンドの横に、スポーツ用の設備を造ることになったのです。そして父は、この仕事も見事にやり遂げました。父はブランコを設置しました。それで生徒たちはブランコをこいで楽しむようになりました。体操用の吊り輪や空中ケープルも造りましたので、体操競技の吊り輪の練習をしたり、腕を伸ばして腕の筋力を鍛えられるようになりました。また、父は柱の周りを回れるブランコと鉄棒も建てました。父は校長先生に、学校とグラウンドの周りに柵を造ることまで頼まれました。

さらに、父は学校が夏休みの間、3か月間守衛を務めました。その間は当直のため学校に泊まりました。このような当直の夜に、父は初めて石油ランプの光で、ロシア語の「ロビンソン・クルーソー」を読了したのです。この本は、航海中に嵐に遭って船が難破したクルーソーについての物語です。クルーソーは一人だけ奇蹟的に無人島に投げ出されて助かるのです。クルーソーは祖国に帰れるまで何年もこの島で暮らしました。この本は、この島でのクルーソーの生活と冒険についての物語です。

「曾津高埼灯台」との出合

(その6・完)

普通会員

岩尾 亮 二

(灯台記念日、新聞のコラム)

過去の記憶を辿りながら、また手持ちのスクラップ等の資料を基に1年間にわたり「曾津高埼灯台との出合」を綴り紹介させていただいた。

昭和44年に奄美大島のI君を訪ね、曾津高埼灯台に出合、そして昭和53年に第十管区海上保安本部灯台部勤務時代、先輩、K監理課長が何を感じて私を曾津高埼灯台へ行って来いと導かれたのか今になっては聞くすべもない。

平成2年、名瀬海上保安部灯台課勤務を命ぜられ奄美大島に着任して1年目であったと思う。

奄美大島の南に寄り添うように加計呂麻島、請島、与路島がある。

1日一便の船便で奄美大島瀬戸の中心、古仁屋港を出港、簡易標識の実態調査、及び港湾調査に赴き、請島に一時上陸、停泊中の時間を活用し同島の簡易標識

を確認調査し与路島向け出港、与路島に入港、上陸した。簡易標識及び各種調査を済ませ明日の船便を待ち、予路港の旅館に一泊した。食までの時間には余裕があり、集落を散策する。集落のはずれに行くと、はるかあなたに奄美の山陵がたなびき曾津高埼灯台が白1点、岬の先端に霞んで見えた。集落の中心にある小学校の運動場を横切り旅館への野道を歩いていると、山裾から老人が杖をつきながら集落へ帰って来る姿を認め、何となく島の様子など聴こうと立たずんでいると老人は足が不自由である。近くに來られて片足が義足であることがわかり、思わず挨拶だけにとどめた。直ぐ頭に浮かんだのはハブの咬傷。しかし、ハブの咬傷で無いかもしいない、けど奄美大島の自然の豊かさとも美しさの中に厳しさがあることを示してくれる一瞬であった。

明治、大正、昭和にかけて曾津高埼灯台を守ってこられた先輩諸氏、この厳しさの中で家族と共に灯台守として燈火を守り子供たちは崖に寄り添うような小道を約1里、西泊集落の小学校に通っていた姿が思いに浮かんだ。過去の厳しい環境の中を辿ってきた灯台守の世界も大きく変わってきた。

先の「その5」で紹介した、元本庁灯台部長の「長

岡 日出雄「氏が思いを綴られた「幸福ともる灯台記念日」の記事で語っておられたが、昭和の終わりに近い30年前の昭和62年当時、灯台守の言葉が残っているのが残念と記しておられたのも、国家行政の在り方の一面からとらえた場合において当然と言う考えは間違いではないであろう。

昭和61年の11月1日の「灯台記念日」に、日本でも歴史のある中央紙の新聞のコラム欄で大正から昭和にかけて活躍した詩人、歌人の歌を交えて海上保安庁の航路標識行政について論説し灯台守と海上保安官について紹介していた。航路標識行政に身を置いたものとして字句において理解しがたい文脈もあるが、当時の航路標識行政の施策と方向性が論評されている。平成の世になって大きく変革を遂げ、また、これからも進んで行くであろう航路標識行政について考えてみた。

中央紙新聞のコラム

まだ夏が終わらない／灯台へ行く道……
と詩人、西脇順三郎はうたう。

「岬の突端へ。

たいていは、あまり用事があつて歩く道ではない。
い。

人間や岩や植物のことを考えながら／また灯台への道を歩き出した」

と誌は結ばれる。

春のそよ風、夏の草いきれ、秋天のいわし雲、冬の烈風、どんな場合にも、灯台は絵になるような気がする。

海潮音を伴奏に、灯台はいつもそこに立つ。

誰にとつても子供の時から、ずっとそこにあつた、と感じられる風景なのではないか。

今日は灯台記念日▼陸でなく、海から見れば、たよりになる、ありがたき道しるべ。

さかのぼれば、六十四年に対馬、壱岐、筑紫に烽と防人を置き、使船を見たら、一発、賊船なら二発、烽火をあげるよう定めたそうだ。

のちに、のろしは遣唐使船の誘導に使われた。

日本の航路標識の起源である▼徳川時代、豊後水道の姫島に、かがり火が置かれ、初の航路標識となった。

明治以来、燈明台番氏、灯台看手（守）、など

と係の名が変わる。

灯台守の俗称もあった。

いまは航路標識事務所職員。

だが「喜びも悲しみも幾歲月」に描かれたような家族で守る灯台は十年ほど前から姿を消す▼むろん沿岸の船にとって、二十キロ、三十キロのかなたから見える光の指標は大事である。

全国四千八百三十五基の灯台は健在だ。

だが、いまや、無人で離れたところで管理できるようにになった。

「喜び…」の舞台となった瀬戸内海の男木島灯台等、多くの灯台が住居部分の歴史的な洋館を地方自治体に売りに出している▼最近は、小さな漁船でも電波による自己位置測定をする。

いわゆる、「電波の灯台」の利用だ。

その一つ、米沿岸警備隊の運営するロランCがやがて中止され日本の船も影響を受ける。

灯台も先端技術の時代。

こんな感情はまだ可能なのだろうか。

「このたびは犬吠埼の灯台の

冷たき色におどろかずわれ」

(晶子)

これまで諸先輩が辿ってこられた海上保安官としての航路標識行政の世界は技術の進歩と共に灯台守の世界から勤務環境が改善され、国際化の大きな流れと共に技術革新が進み大きく、大きく進んできている世界であると言っても過言ではない。

特に、昭和30年代から平成の始まりにかけて、「電波の灯台」の言葉に代表されるように灯台等光波標識に加え、中波ビーコン、ロラン、デッカ、オメガ、海上交通センター等、沢山の各種航路標識及び組織が整備されると共に各灯台から灯浮標まで遠隔監視装置が整備され、最近では携帯電話の端末で遠隔監視、遠隔操作ができるようになり24時間監視制御体制の元、海上交通の安全確保の質は高まり、そして海で働く方々の命が守られて来ている。ひとえに優秀な先輩諸氏の努力と、曾津高埼灯台を守ったように伝統として受け継がれた灯台守の一途な志が根底で支えになっていたと言っても過言ではないと思う。

それを守燈精神と言っているのかどうか、私たちの年代ではわからないし難しいのが本音である。

昭和60年当時であったと思う。第七管区海上保安本部灯台部監理課勤務について早々の時。玄界灘の著名なスリーエンジン方式の電源で点灯する灯台の船着場



神子元島燈台風力発電施設



神子元島灯台太陽光発電施設

が老朽し燃料補給体制に問題が発生した。船着場を整備し燃料補給をパイプラインにし、既存の電源で回転灯器の光源を残す案と、電源を太陽電池化し発光ダイオードの光源にする考えが示され後者に落ち着いた覚えがある。

先般、NHKのテレビ番組「ブラタモリ」で伊豆、下田の港が紹介される中、神子元島灯台が突然紹介された。神子元島灯台

は江戸幕府に欧米列強から開国をせまられ、江戸条約の元、設置点灯され明治、大正、昭和、平成と、東京湾に向かう船舶の変針目標として大切な役目を果たしてきた。そして、これからも果たし続けて行く。

その神子元島灯台の紹介で大きなフネレルレンズと光源の電球が現在でも現用で使われており、映像に映った。写真で見ると、太陽光発電、風力発電を電源として、光源は高機能の電球であり光芒が回る神子元島灯台が目につかび暖かみのある灯台にホッとした自分がいた。光源を発光ダイオード化した玄界灘の著名な灯台には悪いことをしたなと思う今である。

奄美大島、名瀬海上保安部勤務時代、与論、沖永良部島方面の見回りの帰り、私が最後に徳之島沖でフェリーの船橋から見た曾津高崎灯台は「ここが曾津高崎灯台だよ」と言わんばかりに光芒が回っていた。今ほどのような光を届けているか、きつと以前とは違ってきているだろう。平成10年当時であったと思う、保安部勤務の当時、海事関係者の方々との懇談で「最近の灯台は光は輝いて見えるが見つけにくい、以前はポア一つと光り始めポア一つと消えるので見つけやすかった、特に光芒が回る灯台は見つけやすかった」と耳にした覚えが残る。人の目は簡単ではなさそうだ。

昭和40年代後半、人工衛星による位置測定システムの開発が始まり、今ではGPSが地球全体、何時でも何処でも数メートル、場合によっては数センチ単位で測定し、地図上に現在地を示してくれる。それも安価に。スマートフォンでは地図上に歩いたコース、距離を表示し歩数まで表示してくれる時代。航路標識法の元、航路標識行政を司ってきた海上保安庁灯台部が交通部に名称を変え、AI、ITを中心とした業務形態に移って行ったことは、前にもふれたように「灯台守の一途な志」の結果であることは間違いないと思う。

数年前、私は「灯台守」言葉の由来について考察し本誌で紹介させていただいた。明治、大正、昭和にかけて灯台で働く諸先輩の方々の姿を見て、自然に地域の皆さんに頂いた名前であったと結論付けた覚えがある。それも、一途に家族と共に、人里離れた島磯、岬の灯台で自分の職務を果たす志の姿にたいしての通称として。そして、私達の立場で言えることではないが、場合によっては、尊称として。

名瀬海上保安部の勤務を終え、私の2回目の第十管区海上保安本部灯台部勤務の時、ロラン局の廃止が決まり、私の初任地、野間池ロラン航路標識事務所の廃止、ロラン局の閉局を管区本部で進めた。

次の北九州デッカ航路標識事務所では最後の責任者として事務所の廃止、デッカ局の閉局作業を進めた。

これまで玄界灘を中心にゴチ網漁等に広く使われていたデッカシステムであり、地域行政、漁業組合等の方々、これまで当デッカシステムを運用された先輩諸氏の方々に出席を願ひ式典を開催し閉局を報告、電波の停止をおこなった。そして、本文「その3」で紹介した、国際的協力の元、汎世界的なシステムとして運用していたオメガ局も廃止に至っている。

航路標識事務所を廃止し航行援助センターへの移行では、一番最初の組織整備で油津海上保安部航行援助センターの発足に携わった。発足式では「航路標識の更なる信頼性の向上とインターネットなど、海の安全情報の提供に万全を尽くす」旨を誓わせてもらった。

次に専門航路標識事務所では最後の所長を務め5カ年計画で進められてきた航路標識事務所を廃止し保安部航行援助センターへの移行の最終章であった、門司海上保安部航行援助センター発足に携わった。専門航路標識事務所は沢山の方々が務められた伝統のある事務所であり、事務所近傍にお住いの先輩諸氏をご案内し事務所の最後を報告申し上げ、次の門司海上保安部航行援助センター発足への元気を頂いた。

組織も灯台部から交通部へ移行し、見回り業務はアウトソーシングされたと聞く。日本が技術力、経済力の面で高度成長を成し遂げた昭和の終わり付近であったと思う。労働界でホワイトカラーとブルーカラーと言う言葉が良く使われた記憶がある。当時、航路標識事務所は国の出先機関として政策的業務展開を図るという方針で「広報、広聴」が求められ草刈りや樹木の伐採を専門業者にとり声が上がっていた。つまり、国の機関はブルーカラーの業務を外注し専門的國家行政の仕事に専念すべしとの声であったと思う。組織名が灯台部から交通部へ変わっていった流はその流れなのだろう。そして、これまで全国の海上保安部の名称は、海上保安部長が特定重要港湾の港長業務を司ることを示すために、港湾名を冠して組織名としていたが、海上保安行政全般を治める組織の存在を示す意味である。一部の海上保安部の名称が地域行政区画名に改められている。ちなみに、本文中で紹介した海上保安部では油津海上保安部が宮崎海上保安部に、名瀬海上保安部が奄美海上保安部に、現在私が根をおろしている熊本の三角海上保安部が熊本海上保安部に改定された。これも海上保安業務を広く展開する意味において必要な時代の流であろう。

元第十管区海上保安本部長が思いを記述された「灯台今昔」。そして元海上保安庁灯台部長の「幸福ともる灯台記念日」の寄稿文等は、その時の時代を記録するものであり歴史を記す貴重な語りかけであったと言えるし心に留めおきたいものである。私達の現役時代、航路標識は船舶の安全のために一つでも多く必要とされ、沢山整備するために、予算的に安価で小型の標識を整備する方針も示されたこともあった。最近の情報は、航行の安全上機能しなくなった数百基に及ぶ航路標識の廃止も計画的に進められていると聞く。

灯台部から交通部となり、「灯台守」と言う言葉が使われなくなつたように時代は大きく変わっていく。平家物語の冒頭の言葉「諸行無常」が語るように、世の変遷は常である。

反面、曾津高埼灯台を始め各灯台を守つてこられた方々の思いだけは、あらゆる世界で不変であることを信じたたいし、不変であると思う。その思いは語り継がれていくと思うし語り継ぎたいものである。

先のコラムの最後を結んでいる歌

「このたびは犬吠埼の灯台の

冷たき色におどろかずわれ」

(晶子)

は大正から昭和にかけて、文人であり夫である「与謝野 鉄幹」氏と共に活躍された「与謝野 晶子」夫人が歌われた短歌と思われる。何回か犬吠埼灯台を訪れ、白い灯台の姿、もしくは光を見て冷たく感じておられたのだろうか。それが、ある時、何故か、突然に、何かを感じて温かみを覚える自分に気付かれたのではなからうか。また、冷たい中に何か希望を抱かれたのだろうか。おそらく、コラムを書かれた論説者は、そのような灯台、航路標識行政であつてほしいと思つて、この歌で締めくくられたと思う。

戦後生まれ団塊世代の私たちが海上保安学校灯台科に入学し、早々の授業科目に「航路標識概論」と言う科目を学んだ覚えがある。燈台守として無線技術士として幾多の経験を積まれた、今は亡き老練なE教官が「灯台は海の道標として敵味方区別なく使われ、とらえ方によれば平和の道標という考えを持つこともできるかもしれない」と語られた笑顔が思い出される。

時の流れを辿つて記述する中、ふと思ひ起こした。航路標識行政の組織名であつた「灯台部」は、私たちが灯台の仕事に就いた当時は、旧漢字体の「燈台部」であつた。昭和50年前後であつたと記憶しているが、当時はほとんどの人が新字体の「灯」を使うようにな

つていた記憶がある。時代の流に沿うように法律を改正し新字体の「灯台部」としたこと、そしてその作業が大変な苦勞であつたことを、当時、中心になつて担当しておられた霞が関の海上保安庁灯台部の係長から聞き及んだ覚えがある。改定当時は、なんだ「ともしびか」と言う声もあつた。気づいてみると「燈光会」と本誌「燈光」のみに「燈」の文字が残る。私が本誌「燈光」に寄稿を始めたのは本誌発刊の百周年記念誌への寄稿の呼びかけがきっかけであつた。また、前にも記したが曾津高埼灯台と出合の始まりは昭和44年「燈台史百周年」の年であつた。当時、長年の懸案であつた「日本燈台史」が編集発刊されている。そして今を見ると、大きな節目の年、日本燈台史百五十周年の年を迎えている。航路標識行政は150年を経て大きな変遷をたどつてきていて、技術革新のなか今後も大きく変わっていくことは必然であろう。

燈光会は明治中期に発足した共済会の歴史の流れをくみ大正4年に発足し「会員の智徳を涵養し航路標識事業の發展を策し、併せて会員相互の奨励慰藉を目的とす」として発足している。100年以上にわたつて航路標識業務を見詰め導いて来た燈光会は今後大きく変遷をたどるであろう航路標識業務にとって大切な役

目を担っているのではなからうか。

「歴史を訪ね新しきを知る」温故知新のための大きな役目を担っているであろうし期待したいものである。また、同会と共に発刊百周年を超える本誌「燈光」は日本で一番歴史を重ねた職場の機関誌と言ふこ

とを聞き及んだ覚えもある。その伝統を繋ぎ交通部の枠を超えて海上保安庁の一つの機関誌として更に末永く継続され発展し多くの方々に読み継がれていくことを期待いたしてやまない。

曾津高埼灯台をはじめ奄美諸島の灯台の巡回道路、敷地には沢山の花々が彩りを添えていた。特にエラブユリの大輪は灯台に彩りを添え、暑い中巡回する私達を迎えてもらった。

強い思い出として残っている。

燈光にかがやき添えるエラブユリ

沖ゆく船に香り届けし



曾津高埼灯台、東シナ海

(完)

のぼれる灯台(16基) スタンプラリー達成者

第1弾



昨年10月からスタートしました「のぼれる灯台(16基)スタンプラリー」は、大好評を頂いており、7月13日尻屋埼灯台にて初の達成者が出ました。尻屋埼灯台は、季節参観のため、スタンプ押印はこの日が初日でした。参観開始に伴い尻屋埼灯台で4名の達成者が出ましたので紹介いたします。

第1号 成田 和生 様(61歳)神奈川県海老名市在住

| No. | 参観日 | 参観灯台名 |
|-----|------------|---------|
| 1 | 平成31年2月2日 | 平安名埼灯台 |
| 2 | 平成31年2月12日 | 初島灯台 |
| 3 | 平成31年2月18日 | 残波岬灯台 |
| 4 | 平成31年2月24日 | 御前埼灯台 |
| 5 | 平成31年3月1日 | 観音埼灯台 |
| 6 | 平成31年3月5日 | 犬吠埼灯台 |
| 7 | 平成31年3月5日 | 野島埼灯台 |
| 8 | 平成31年3月6日 | 塩屋埼灯台 |
| 9 | 平成31年3月17日 | 大王埼灯台 |
| 10 | 平成31年3月18日 | 安乗埼灯台 |
| 11 | 平成31年3月18日 | 潮岬灯台 |
| 12 | 平成31年3月22日 | 出雲日御碕灯台 |
| 13 | 平成31年3月23日 | 角島灯台 |
| 14 | 平成31年4月2日 | 都井岬灯台 |
| 15 | 令和元年7月11日 | 入道埼灯台 |
| 16 | 令和元年7月13日 | 尻屋埼灯台 |



令和元年7月13日尻屋埼灯台にて

☆ スタンプラリーを始めたきっかけ

今年2月に宮古島を旅した際、灯台スタンプラリーが始まったことを知り、全国16か所なら数ヶ月で達成可能と思い、始めました。

☆ 16か所達成した感想

灯台は、当日の天候によって公開されない事もあるので、予備日を考えずに達成できたのはラッキーでした。

8月1日現在の達成者は、下記の皆様です。

(同着) 第1号 神奈川県海老名市在住 成田 和生 様

第1号 北海道在住 男性

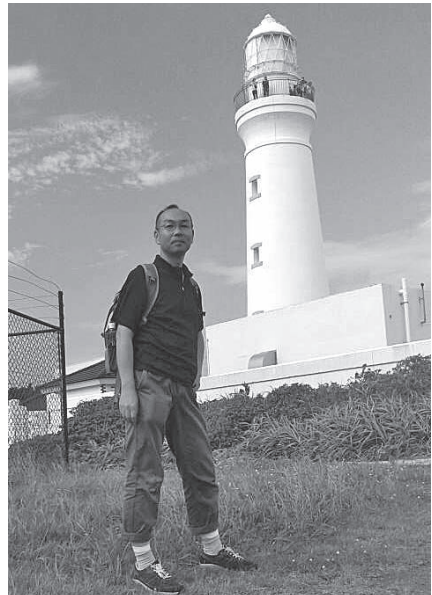
第3号 大阪府大阪市在住 佐々木 祐 様

第4号 兵庫県在住 ペンネーム JIN 様

達成おめでとうございます！

第3号 佐々木 祐 様 (48歳) 大阪府大阪市在住

| No. | 参観日 | 参観灯台名 |
|-----|------------|---------|
| 1 | 平成31年2月11日 | 平安名埼灯台 |
| 2 | 平成31年2月15日 | 初島灯台 |
| 3 | 平成31年2月24日 | 大王埼灯台 |
| 4 | 平成31年2月24日 | 安乗埼灯台 |
| 5 | 平成31年2月25日 | 潮岬灯台 |
| 6 | 平成31年3月2日 | 犬吠埼灯台 |
| 7 | 平成31年3月3日 | 野島埼灯台 |
| 8 | 平成31年3月6日 | 塩屋埼灯台 |
| 9 | 平成31年3月10日 | 御前埼灯台 |
| 10 | 平成31年3月16日 | 角島灯台 |
| 11 | 平成31年3月23日 | 観音埼灯台 |
| 12 | 平成31年4月28日 | 入道埼灯台 |
| 13 | 令和元年5月4日 | 都井岬灯台 |
| 14 | 令和元年6月30日 | 出雲日御碕灯台 |
| 15 | 令和元年7月7日 | 残波岬灯台 |
| 16 | 令和元年7月14日 | 尻屋埼灯台 |



犬吠埼灯台にて

☆ スタンプラリーを始めたきっかけ

平成27年の2月頃に都井岬灯台を訪れて「日本の灯台50選」という冊子を目にして購入し、行ってみようと思ったのが灯台との出会いでした。50選を巡る旅をしていた時に、平安名埼灯台を訪れて、スタンプラリーが実施されていることを知り、1番乗りを目指したのがきっかけです。

☆ 16か所達成した感想

達成した正直な感想は、「残念…1番じゃなかった」ということでした。7月13日は外せない仕事があったので、尻屋埼灯台参観再開の日には行けませんでした。印象に残った灯台は塩屋埼灯台。奇しくも震災から8年が経過しようとしていた頃訪れて、犠牲者となってしまった幼い少女が描いた灯台（絵画）コンテストの絵が素朴でなおかついきいきしていて感動しました。

第4号 ペンネーム JIN 様 兵庫県在住

- ☆ スタンプラリー開始年月日 平成30年12月16日 角島灯台
- ☆ スタンプラリー達成年月日 令和元年7月14日 尻屋埼灯台

☆ スタンプラリーを始めたきっかけ

偶然立ち寄った角島灯台で16か所のスタンプラリーがあることを知り、16か所の位置を見て「これは行ける！」と思ったので参加しました。

☆ 16か所達成した感想

灯台と一口で言ってもその場所、環境や歴史によって様々なスタイルがあることを知りました。灯台の光は人工物だけど、その経緯や人々の思いが込められていて、人の暖かさを感じる光だと思いました。

☆ その他

個人的に達成証のようなものがあれば嬉しく思いました。

事務局では、参観者の声にお応えし達成証を作成することといたしました！



2019年 尻屋埼灯台・入道埼灯台の参観について



尻屋埼灯台、入道埼灯台の参観業務は、**11月4日(月)**までとなっております。皆様のご訪問をお待ちしております！

燈光会尻屋埼支所 ☎ 0175-47-2889
燈光会入道埼支所 ☎ 090-1931-9706
燈光会事務局 ☎ 03-3501-1054

最新の参観状況につきましては、
当会HPをご覧ください。

燈光会HP
QRコード



<https://www.tokokai.org>



五 管 区

淡路市夏祭りに参加
地元の祭りで海保をPR

淡路市夏祭りは毎年7月に実施されている祭りで、ご当地グルメフェアの模擬店や、ステージイベント、緊急車両等展示、花火大会などを実施しており、今年で14回目の開催で、来場者数約4万3000人規模の祭りです。

大阪湾海上交通センターもブース出展などで参加しており、参加は今年で4回目となります。

今年は連日雨天が続き、台風の影響などもあり、開催が危ぶまれましたが、令和元年7月20日(土)は天気も無事晴れて、開催することができました。

他の省庁からは、警察、消防、自衛隊がブース出展しており、警察車両、消防車両、装甲車等の車両展示がされており、装備面では大阪湾センターは大幅に見劣りしているものの、スーパーボール等すくい、バルーンアートなど職員のアイデアにより、13時から15時の2時間のブース展示で882名もの来場者が訪れ、他の省庁を上回る集客することができました。

ブース展示では海上保安庁のパンプレットや、巡視船艇、航空機、灯台のペーパークラフトの配布、制服試着、海上保安業務及び管制課程の紹介、スーパーボール等すくい、バルーンアートなどを行いました。ペーパークラフトではうみまる君、巡視船艇、灯台等の完成バージョンを見て興味を示す人が多く、スーパー



うみまる君のバルーンアート

ボール等すくいでは子供たちが次々にすくいに来では楽しんでいました。また、来場者は海上保安庁の紹介ビデオを熱心に眺めたり、うみまる君のバルーンアートをもらって喜んだり、制服を試着してうみまる君と一緒に記念写真を撮ったりするなど様々な方法で楽しんでいました。大盛況の中、休むまもなく2時間のブース展示はあっという間に終了しました。

大阪湾センター田中所長はお客様として祭りを楽しんでいたそうですが、淡路市役所の方から、「海保さんのブース凄いたくさん人が入ってましたよ。」との言葉を頂いたそうです。(大阪湾海上交通センター)



ブースの展示状況

ラジオ工作教室を開催

くアナログの世界に魅了されてく

7月28日(日)、大阪湾海上交通センターにおいてラジオ工作教室を開催しました。無線への興味をきっかけに海上交通センターの理解を深めてもらうことを目的に、地元淡路島の小中学生42名を対象に開催したものです。

当センターまでは、兵庫県淡路市の岩屋港から約7.5キロメートルをマイクロバスで移動、くねくねの山道を通り山頂まで走ります。子供たちは『どこにつれていかれるのだろうか?』と不安そうです。

：そこに「うりぼう」の群れがバスの前を横切り、可愛いうりぼうに子供たちははにかみ顔(^^)



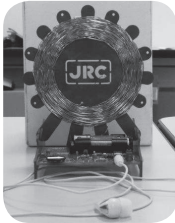
出迎えてくれた「うりぼう」

センターに着いて、最初に施設見学や青空のもと明石海峡の雄大なパノラマを楽しみました。

今回で第3回目の開催となる同教室は、身近にあるもの(ICカード、カーナビ等)で電波を使っているもの(何かというクイズ形式の講義から始まり、工具やはんだごての使い方)を丁寧に説明し、はんだ付けが初めての小学生でも安心して取り組めました。

ラジオ工作の一番のポイントはアンテナとなるスパイダーコイルに15メートルのエナメル線を巻きつける作業で、丁寧に巻きつけるほど美しい音質になります。

完成後、電池を入れ、イヤホンをつけて、周波数ダイヤルをゆっくり回すと、「聞こえた!」「野球やってる」と、うれしい歓声があちこちで聞こえ始め、作っていると真剣な表情



完成したラジオ

情が一転、日に焼けた顔一杯の笑顔を見たとき、我々も同じくらい喜びを感じることができました。

完成したラジオで当センターのラジオ放送も聴きその役割を勉強し、最後に参加者全員で自分のラジオを手にして記念撮影をしました。参加した小学生からは『自分だけのラジオが出来て嬉しい!』『海保紹介DVDが良かった。よかった、特救隊になりたいと思いました。』などの感想があり大盛況に終わりました。

社会貢献活動として教材の提供や指導スタッフを派遣していただいた日本航路標識協会と(株)日本無線に心より感謝いたします。
(大阪湾海上交通センター)



全員で記念撮影

運用管制官の資格認定審査を実施 ～運用管制官を目指して～

令和元年7月31日、運用管制官（運用者）の資格認定審査が実施されました。

同資格は国際ルールに基づいたもので、「海上交通センター運用管制官等資格認定実施要領」による海上保安学校門司分校での運用者養成課程（約3



口述審査

週間）や職場研修（合計約4ヶ月間）を履修し、同審査に合格しなければ得られません。

今回の審査対象者は、ベテランの指導官等による職場研修を繰返し履修して知識と技能の習得・向上を行ったほか、公休日等には自宅で幼い子どもが就寝後に復習や予習を怠らず、この日を迎えました。

審査は審査対象者を指導・育成して



実技審査

きた指導官等が見守り、緊張感が漂うなか第五管区海上保安本部交通部航行安全課の管制システム指導官が審査官として、関係法令・規則等の運用者の業務に必要な知識を評価する口述審査及び各種機器取扱いのほか、訓練卓等を使用しての船舶動静把握や情報提供・勧告・指示の方法などの技能を評価する実技審査の順に行われ、約2時間終了しました。

審査の結果通知はまだですが、合格すれば海上保安庁交通部長から運用管制官（運用者）資格が与えられ、ようやく一人前の運用管制官になります。

本年度、大阪湾海上交通センターは、新たに2名の運用管制官（運用者）等を育成する計画で、引き続き人材育成に努めます。

（大阪湾海上交通センター）

JAPAN COAST GUARD

海上保安試験研究センター

2019海保フェアin立川

施設一般公開

入場無料



令和元年10月19日(土) 10:00~15:00

(入場は14:30まで)



★主なイベント内容

○業務紹介

- 灯台体験ツアー
- 試験研究棟見学ツアー
- 化学実験コーナー

- 海上保安庁ヘリコプターによる救助訓練
立川広域防災機関によるヘリコプター展示
(航空機の都合により展示が中止になる場合がございます)

- 海上保安庁音楽隊によるランチタイムコンサート

- 学生募集、職員採用に関する相談

- 立川体験スタンプラリー (立川商工会議所主催)



◆駐車場はありませんので公共交通機関を
ご利用ください。

◆ペットとの入場はご遠慮ください。

問い合わせ先 海上保安試験研究センター管理課



東京都立川市泉町1156
Tel.042-526-5630



関門海峡海上交通センター 30周年記念行事出席者募集



令和元年に30周年を迎えた関門海峡海上交通センターで、主に関門海峡海上交通センターの運用に関係された方を対象として感謝を込めて、151周年灯台記念日に業務見学を主とした記念行事を行います。

- 1 日 時 令和元年11月1日（金）12時から
- 2 場 所 関門海峡海上交通センター
住所：福岡県北九州市門司区松原2-10-11
電話：093-381-6699（FAX兼用）
- 3 行事概要 (1) 昼食会（所長謝辞、参加者代表からの祝辞を含む）
(2) 業務見学（意見交換等を含む）
- 4 募集人数 30名程度（応募者多数の場合は抽選となります）
- 5 応募方法 往復はがき、FAX、電話にて、住所、氏名、年齢、電話番号をお知らせください。
- 6 応募締切 令和元年9月30日（月）（郵送の場合は当日消印有効）
- 7 案内状発送 令和元年10月8日（火）
〔応募者多数で抽選の場合、ご案内できない方へは別途ご連絡いたします〕
- 8 その他 センター内の移動は階段のみとなります。エレベーターはありません。〔昼食会2階、業務見学3階、4階、屋上〕

昭和三十一年九月二十五日
第三種郵便物認可
（隔月一回五日発行）

「燈光」

九月号
第六十四卷
第五号

